シカゴにおける黒人市長の誕生と彼の死によせて

――一九八〇年代アメリカ大都市政治の一軌跡――

紀平英作

一　はじめに

共和党保守派を基盤としたロナルド・レーガンの大統領就任で開幕した一九八〇年代、アメリカ合衆国における黒人運動家さらにはリベラルなオピニオン・リーダーらの大都市における政治運動は、善きにつけ悪しきにつけ、黒人都市住民を広範囲に巻き込んだ都市単位の黒人市長擁立の運動に牽引され、あるいはそれを先導しつつ展開しているようにみえる。今年（一九八九年）のニューヨーク市長選挙において、黒人候補のデービッド・N・ディキンズ・マンハッタン区長（David N. Dinkins）が四選を目指した現職市長エドワード・I・コッチ（Edward I. Koch）を民主党予備選挙で破り（九月一二日）、本選挙でも共和党候補ルドルフ・W・ジュリアーニ（Rudolph W. Giuliani）を退けて当選した（一一月七日）、ニューヨーク政治史上画期的といってよい新しい事件も、間違いなくこの流れの延長線上にある出来事なのであろう。表1に見る通り、

表1　アメリカ大都市黒人市長一覧　（1989年4月現在）

都　　市	黒人市長	在職期間
アトランタ（Ga.）	Andrew Young（D）	1982 -
クリーブランド	Carl B. Stokes（D）	1967 - 1971
シカゴ	Harold Wasington（D）	1983 - 1987
デトロイト	Coleman Young（NP）	1974 -
ニューアーク（N. J.）	Kenneth Gibson（D）	1970 - 1986
	Sharpe James（D）	1986 -
ニューオーリンズ	Ernest Morial（D）	1978 - 1986
	Sidney Barthelmy（D）	1986 -
ボルティモア	Kurt Schmoke（D）	1988 -
フィラデルフィア	W. Wilson Gibson（D）	1983 -
ロサンゼルス	Tom Bradley（NP）	1973 -
ワシントン・D. C.	Marrion S. Barry, Jr.（NP）	1979 -

a）市長名の後にある括弧内の文字は，所属政党など（D - 民主党，NP - 無党派）を表わす。
b）黒人市長がアメリカの都市において初めて誕生したのは，表内のクリーブランド市，ストークス市長，1967年11月選出，および同月インディアナ州のゲーリー市で当選したリチャード・G・ハッチャー（Richard G. Hatcher）が最初である。
c）現在黒人市長の総数はアメリカ全国で300人ほどに上る。

アメリカ都市部における黒人市長の誕生は、歴史的には一九六〇年代末に始まり、七〇年代にはかなりの広がりを示して八〇年代に引き継がれた。以下本論は、八三年、初めての黒人市長、ハロルド・ワシントン（Harold Washington）市長誕生にわいたシカゴ市を事例として、八三年市長選挙から八九年まで、シカゴにおける黒人市長擁立の運動が辿った軌跡を通観しようとするものである。

八三年のシカゴは当時の人口で合衆国第三位の都市であった。八〇年代初めに第二位の座をロサンゼルスに譲ったとはいえ、それが中西部を代表する大都市であることに変わりはない。シカゴが長い黒人差別の歴史を持ったというばかりか、中西部を代表するこの大都市において初の黒人市長が誕生したという事実は、その後のアメリカ都市政治全体に対しても、また全国的な黒人政治運動の赴く方向に対しても、大きな波紋を与えるものであった。八三年のシカゴ市長選挙の翌年であった八四年大統領選挙において、黒人指導者ジェシー・ジャクソン（Jesse Jackson）が試みた民主党予備選出馬は、間違いなくこのシカゴにおけるワシントンの勝利に弾みを受けた新しい黒人政治運動の出現であった。八〇年代が終わろうとしている今、八三年シカゴ市長選挙に遡ってさしあたり重要と思われる事実を整理してみることは、八〇年代アメリカ政治の起伏を多様な視野で把握するためにも、さらには今後、

九〇年代アメリカ政治の変動を展望する意味でも、相応の意義を持つように思うのである。

ところで、本論に入る前にわれわれはあらかじめ次の点にも付言しておきたい。

この二〇年間、つまり一九七〇年代から八〇年代にかけてアメリカ大都市では、正常な雇用を獲得出来ない青年から中年層にいたる男性労働者の増加のために、都市下層住民の間には、社会生活の隅々にまで浸透した極めて包括的な意味での貧困化が急速に進行していると言われる。とりわけマイノリティ集団においてこの貧困化が深刻であることは言うまでもない。ある社会学者は、七〇年以降の十数年の間に、失業の増加と貧困者の特定地域への集中のために、都市中心部の黒人貧困者街では麻薬使用者や凶暴な犯罪が数を増し、また生活保護を受ける母子家庭が増加して、今日憂慮すべき社会的混乱状態が出現していると警告を発している。事実上、黒人貧困者地域においては通常の家族単位の社会生活が、半ば崩壊しつつあるのが現状であるとも言う。なるほど、八〇年、その年一年間に出産した一五歳から二四歳にかけての黒人女性の七割弱が、未婚であったという驚くべき統計数字を見れば、この指摘もあながち大げさではない。彼女らの多くは出産後、家族と離れて独立することを余儀なくされると言う。しかし、それにも拘らず彼女らには結婚の機会が極めて少ない。本来このような女性と通常の家庭を持つはずの男性が、彼女らを養う正常な雇用を持たないからであると言う。結局のところ八四年の統計では、黒人家族の実に四三パーセントが婦人世帯主家族であると言うのである（彼女らの多くが生活保護を受けていることは言うまでもない）。社会学者ウイリアム・ウィルソンは、こうした黒人家族の崩壊にも似た現象を、黒人社会の伝統的な怠惰な生活様式、いわれところの「貧困の文化」で説明する今日の保守的政治議論にはげしく反発する。大都市黒人の雇用が人種差別と共に、七〇年代以来の景気の不安定な変動、さらには製造業が衰退する経済構造の変化によって今日大幅に制限されていること、それこそが現在こうした大都市下層労働者とその社会の切り捨てにも似た混乱状況を惹起している最も主要な原因であると、彼は強調しているのである。[1]

当面筆者はこのウィルソンの議論に直ちに是非の評価を下すことは差し控えておきたい。ただ、ウィルソンの議論を下敷きとして今日のアメリカ社会を改めて眺めてみれば、確かにいくつかの当惑すべき事実や問題に直面することは確かである。なりよりも今日的視野からみれば、われわれはまた次のような現実も指摘しておくべきであろう。八〇年代後半の現在、アメリカ経済は、七九年からの不況を乗り越えて顕著な回復基調を示し、八八年の時点では景気が一部で加熱気味とさえ言われる。また黒人社会は決して六〇年代と同様ではないと言われる理由の一つは、実のところ黒人貧困家族の混乱が一方でますます進行している中で、同時に所得の上昇した黒人中産階級もまた、六〇年代に較べて大幅に増加している点でもある。さしづめ今日のアメリカには、景気の好転と中産階級の安定した生活が、大都市における貧困の進行と文字どおり隣り合わせの現象として並存しているということになるのである。

なるほどわれわれは、この景気の好転と大都市における貧困問題の進行という奇妙な取り合わせを、余りに安易に結び付ける議論は慎むべきかもしれない。しかしこの二つの事実が決して無関係でないことも確かであろう。七〇年代に入って国際経済競争がますます激化し、世界経済における相対的な地位の低下が進むアメリカ経済は、以後この八〇年代に入って、教育水準の低い貧困者には直ちに雇用機会の拡大につながらない金融・保険、サービス・情報、さらにはハイテク産業の比重が増す、脱工業的構造に従来にもまして急速に変化していくようにみえる。今日そうした金融、サービスおよびハイテク産業を中心とした景気回復が進む中で、その実雇用は都市中心部を素通りし、教育水準の低い労働者には必ずしも大幅には拡大しないのが現状である。その結果、七〇年代以来、アメリカ社会の所得格差は疑いなく拡大している。都市における貧困問題がこうした所得格差の拡大の一つの投影であると見ることもあながち誤りとは言い難いのである。ついでながらそうした状況の中でも、連邦政府の中心的経済政策は雇用増加よりインフレ抑制を優先し、社会福祉の拡大は少なからず抑止されている。むしろレーガン政権のもとで、社会福祉向けの予算にかなりの減少が生じたのも八〇年代アメリカ政治の重要な

特徴の一つに数えられるのである。

以上を直ちに経済と社会のゆがみの拡大とみるか否かは論者によって異なるであろう。しかし、大都市の貧困化が今日この種の問題に政治的関心が注がれた一九六〇年代アメリカに較べてもさらに深刻化し、大都市部には現在、六〇年代までの都市ゲットーにも見られなかったような社会的混乱状況が進行しつつあると言われることだけは、本論を進めるにあたってわれわれがまず念頭に置いておく必要のある問題である。この貧困問題にどのように対応するかは、現代におけるアメリカ都市政治、さらにはアメリカ政治の質を問う問題に相違ない。黒人市長擁立の運動が、大都市においてここ二〇年、黒人人口が三〇パーセント以上、場合によっては半数にも近い数字を占め始めたという、人口比率の変化だけが結果した政治現象なのか、それとも他にアメリカ政治に何か付加する独自の質を持った新しい変化であるのか。いま筆者はその疑問に回答を提示するほどの能力を持たない。しかし、この研究がそのような問題を今後に考える一つの手掛りになればと念じている。

二　シカゴ民主党マシーンとハロルド・ワシントン

一九八三年シカゴ市長に就任したハロルド・ワシントンは、そもそもシカゴの民主党組織を母体に政治家としてのスタートを切った。しかし、八〇年代の彼の活動は、このシカゴ民主党組織との激しい抗争を軸として展開することとなる。だとすれば、一九三一年以来シカゴにおいて、一度たりとも共和党に市長職を譲ったことのない強力な集票能力のゆえに、通常シカゴ民主党マシーン（Chicago Democratic Machine）と特別の意味をこめて呼ばれるこの民主党地域組織の簡単な説明から叙述を始めることも、われわれの議論を合理的に進める上で一応の筋道となるであろう。

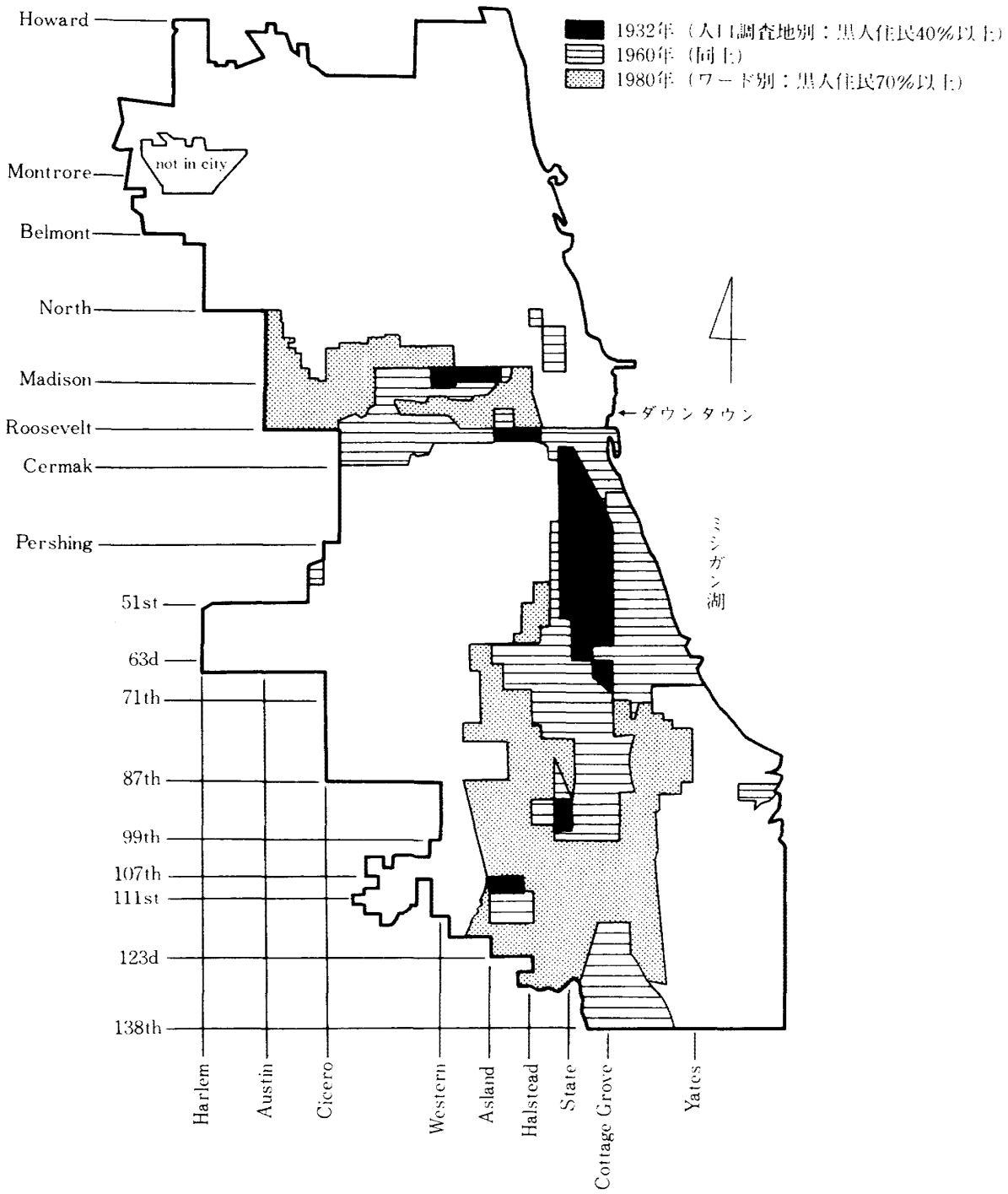
通常、シカゴ民主党マシーンと呼ばれる組織の形成は、一九三一年シカゴ市長選挙において民主党候補アントン・J・

サーマック（Anton J. Cermak）が現職市長ウイリアム・H・トンプソン（William H. Thompson, 共和党）を破った時期から始まると言われる。その後、三〇年代、ニューディール期の民主党優位の全国的潮流が、このシカゴ民主党組織の発展を支えた有力な政治的背景の一つであったことはよく知られた事実であろう。その意味では、三〇年代に基本的態勢が確立したとみてよいシカゴ民主党マシーンは、サーマックが勝った三一年以来、八〇年代の初めまでの五〇年間、すべてのシカゴ市長選挙において勝利を収めてきたばかりではない。シカゴ市会においても、七〇年代に最後の共和党系議員一人が消えたことによって、市会五〇議席のすべてを民主党系議員が占めるという状況が今日まで続いている。なるほどこの五〇年余、シカゴはまさに、民主党の金城湯池の地と言うことになるのである。[2]

しかし、こうしたシカゴ民主党の長期一党支配の歴史においても、われわれの関心から特に注目してよい時期は、五五年の市長当選以後、七六年一二月在職中に急逝するまでの実に二一年間、シカゴ政界に君臨して権勢をふるったリチャード・J・デーリー（Richard J. Daley）と、彼の市政期であった。この長期支配だけでもシカゴ市政に一時代を画したと言ってよいデーリーの市政期は、またシカゴ民主党マシーンの最盛期でもあった。デーリー市政期の半ばにあたる一九六六年、公民権運動指導者としてシカゴを初めて訪れたマーティン・ルーサー・キング二世（Martin Luther King, Jr.）とデーリーの出会いは、この時期のシカゴ民主党マシーンの強力さを鮮烈に物語って興味深い。

図1を参照したい。六〇年代前半、一〇〇万人に近いシカゴ黒人人口の半数以上が完全な黒人地区に住むといわれたいわゆる黒人ゲットーが、市の南部（いわゆるサウス・サイド）とダウンタウン西方（ウェスト・サイド）の二方に広がっていた。第二次大戦後の人口増加によって領域面積を大幅に拡大したこの六〇年代のシカゴ黒人ゲットーを、近年の研究者が、市政府の暗黙の了解あるいは積極的な人種分離政策の保持を背景として形成された、その意味では、少なからず公的な性格を持ったものであったとして、第一次大戦前から形成された三〇年代までのゲットーとの相違を指摘し「第二次ゲットー」と呼ぶこと

図1　シカゴにおける黒人居住地域の拡大　1932年[ア]，1960年[イ]，1980年[ウ]



典拠　ア）*Negro Areas in Chicago*, one of two maps of Chicago 1932, prepared by Earl R. Moses, Dept. of Research & Record, Chicago Urban League, 1932, Chicago Commons Papers, box 25, Chicago Historical Societyより作成。
イ）Hirsh, *Making the Second Getto*, p. 8, map 3より作成。
ウ）Paul Kleppner, *Chicago Divided: The Making of a Black Mayor* (Northern Illinois Univ. Press, 1985), p. 35, map 1より作成。

を提唱していることも、この際われわれの考察にとって記憶しておいてよい事実であろう。第二次大戦後のアメリカ北部大都市における黒人人口の増加は、もとより黒人住民の自然増にもよったが、より多くの割合は、大戦後これまでにもまして増えた南部農村地域からの黒人人口の移住にあった。急増するこうした黒人人口の住宅問題は、大戦後のアメリカ大都市のいずれにおいても急を要する極めて深刻な社会問題であった。戦後の黒人ゲットーに較べれば、なお小規模なものに過ぎなかった旧来のゲットーをはみ出して膨れでる黒人人口を再び特定の地域に配置し、隔離するのに最も大きな影響を持った政治的手法は、市による都市再開発計画と黒人住区を特定の地域に誘導するような公共住宅政策であった。第二次ゲットーはその意味でシカゴ市政が意図的に承認し政治的に結果したものでもあった。かく言うのが、第二次大戦後のシカゴ・ゲットーの研究に「第二次ゲットーの形成」という表題を冠したヒルシュの議論の核心なのである。[3]

キングは、このように政治的に承認された人種差別主義的住区と学校施設の分離状況、また職業差別に対し、抗議のキャンペーンを街頭で組織するかたわら、僅かなパトロニージ――たとえば市職員に採用するなどの職を斡旋する行為――に飼い慣らされて民主党組織に従順に投票し続けていたシカゴ黒人に対しても、政治的覚醒と自立を訴えることに多くのエネルギーを費やしたという。しかしキングの運動はこの段階では確実に挫折した。六六年八月、黒人入居者の多い公共住宅をゲットー内に建設することによって、市政が意識的に維持してきた住宅隔離政策などを改めることを取り決めたシカゴ住宅局と公民権運動家との間に結ばれた同意事項は、実のところ将来に何のタイムテーブルも定めない、デーリー側の善意の表明に過ぎないものであったと評される。しかしこの協定をもってキングら公民権運動側はシカゴでの大衆的運動をひとまず打ち切らざるを得なかった。これが通常、デーリーに対するキングの敗北と称される事件であった。[4]

キングの敗北理由を分析した研究者の多くは、この六〇年代中頃時点でのシカゴ黒人社会のあり方を、一つの問題点として取り上げている。キングを呼んだ一部活動家を別として、イリノイ第一地区選出連邦下院議員ウイリアム・L・ドーソン

(William L. Dawson) を始めとしたゲットーの政治的、また社会的指導者の多くは、民主党マシーンに忠誠を守り、キングの運動によそよそしいか、あるいはあからさまに敵対的であったという（なお連邦下院選挙区イリノイ第一地区とはシカゴ市南部にあたる）。キングの展開した運動が基本的に街頭における民衆参加のデモを組織したり、抗議集会を盛り上げることに主眼をおいた運動であったことを思えば、彼が覚醒を求めた当のシカゴ社会における黒人政治指導者あるいは社会的指導者の冷めた、あるいはあからさまに敵対的でもあった反応が、キングの運動を決定的に制約した要因であったことは容易に想像できるところであろう。要するに、この六〇年代中頃の時点では、一方で激しい都市暴動が始まるかげで、シカゴ黒人社会の指導者は先覚者キングが持ち込んだ公民権運動に十分な反応を示さなかったのが実態であったと言うのである。[5] なるほどこの事実は、黒人地区での投票がその後も圧倒的にデーリー支持を続けた点からも、しばらくは首肯せざるを得ない現実であった。そしてこの投票パターンは、この時点でのシカゴ民主党マシーンの強力な支配力をやはり示唆するものに他ならなかった。シカゴ都市史に精通した歴史家オルスワングは、こうした六〇年代中葉のデーリーと黒人社会との関係を次のように結論しているのである。「もし何らかの切っ掛けがあれば、この六〇年代の中頃に、黒人コミュニティがマシーンから離脱することも可能であったが、実際にはそうしようとする指導者は現れなかった。……デーリーは、彼の支持者である白人労働者をそらさぬ程度に、彼に対する黒人地区の不満を拡散するよう黒人の要求に適度に応えるよう配慮した。こうした手法によって黒人地区におけるデーリーの得票は依然として膨大であった[6]」と。

しかし、短期的には失敗にみえたが、キングのシカゴ訪問は、公民権運動の北部都市への拡大というアメリカ政治全体に与えた広範な影響の下で、後のシカゴ政治にもそれなりに変化の遺産を残したこともまた確かであった。もともとマシーン子飼いの政治家として五三年にシカゴ政治との係わりを持ち始めたハロルド・ワシントンが、キングの運動の継承を謳ってマシーンから独立した動きを見せ始めたのはイリノイ州下院議員時代の七五年であった。[7] ただ、それまでは間違いなくデー

リーの傘下にあったワシントンの行動が徐々にではあってもマシーンと区分され始めるのが、六六年から数えて九年も後であったことは、キングの遺産がシカゴにおいて顕在化するまでにシカゴ黒人社会の中に、独自の運動を発展させるための多くの時間と人材養成が必要であったこと、さらにはシカゴ市全体における人口の変化が背景にあったことを示していた。

六〇年代以降、特に七〇年代のシカゴ人口の注目すべき変化を確認するため、簡単なものではあるが表2が参考となるであろう。

やや長い視野でシカゴ人口の変化を読みとるため一九四〇年からの数字を挙げたこの表を見てまず注目してよい第一点は、シカゴの全体人口が五〇年代から停滞期に入り、六〇年代以降確実に減少している点である。しかしその一方で黒人人口は六〇年に二・七割、そして七〇年には三割を越え、八〇年には四割を占めるまでに増加している。したがって改めて指摘してよい第二点は、黒人人口（さらに近年はヒスパニック系住民）の増加とは対照的に、一九六〇年代以降シカゴ大都市圏の中心部にあたる都市シカゴでの白人人口が急速に減少しつつある傾向であり、とくに七〇年代に入ってのシカゴ白人人口の減少は、およそ急速という表現以上のものを必要としているようにも見えるのである。すでに従来からの傾向であったとはいえ、右のような白人人口の減少速度からすれば、一九七〇年代が都市としてのシカゴの人口構成にとって歴史的とも言ってよい大きな転機であった事実は、疑いを入れないであろう。いまその理由はさておく。われわれがここで考えたいのは、シカゴ政治を三〇年代以来支配してきた民主党マシーンの基盤が、市会選挙区（ワード）組織を単位とした常に強力な集票力にあったとすれば、こうした住区住民構成の急速な変化は七〇年代に入って、マシーンの維持におそらくかつてない試練を課していたであろう、その点である。

表2　シカゴ人口（1940年－1980年）　単位千人

	'40年	'50年	'60年	'70年	'80年
全人口	3,396	3,620	3,600	3,369	3,005
白人人口	3,118	3,111	2,705	2,181	1,299
黒人人口	277	491	812	1,102	1,187

なお，1970年代から，シカゴのみならずアメリカの大都市においては，白人，黒人人口以外の住民，特にヒスパニック系人口の数が急速に増加している。さしあたりヒスパニック人口がシカゴ全体人口に占める割合は，70年の7パーセント強から80年には14パーセントに至っている。

典拠　Paul Kleppner, *Chicago Divided*, p. 34.

ちなみに、シカゴ民主党マシーンを長年に亘って研究した政治学者ラコブは、マシーンを単なる政党組織ではなくそれ以上のものと理解する。彼はシカゴ市政と民主党組織との関係を、たとえば第二次大戦後の東欧における国家と共産党との関係にも比して、次のように説明しているのである。マシーンとは、シカゴ市政およびイリノイ州クック郡政府機関という地方自治体が孕む権力ばかりか、それが生み出す公的資金、市職員などの雇用、さらにはそうした資金と雇用の分配にまつわる社会的地位の配分までを、すべて特定組織の管理下に掌握することで市政の運営をあらゆる局面で一元化し、これを通して都市社会に保守的な安定性を保持していこうとする政治機関に他ならない。それはイデオロギー的であるよりも、権力と結びつくことなくしては存在し得ないほどに徹底してプラグマティクな実利で結びついた組織であり、さしづめマシーンとは、市会、市庁、市の関連団体を核とした公権力機構のあらゆる機関にその影響を及ぼすための手足を広げた、その意味での権力機構とほとんど不可分に重なりあった複合的な政治組織であった、と。そしてこのような政治組織としてのマシーンが従来みせた歴史的特性とは、一つに、党派的政治家、運動員また受益者らが組織に対して示した徹底した忠誠であり、二つに、市会選挙区組織が選挙の折ごとに、集票のため常に精力的に働いた組織の効率性であり、そして第三に、市政を取りまく環境変化に組織をたえず対応させた指導部の適応力でもあった[8]、と。

一九三〇年代初めに形成されたシカゴ民主党マシーンの中心部分が、北部から中西部の都市部民主党を一九世紀以来支え、民主党組織の要であったアイルランド系政治家を頭に、アメリカ史の上では新移民と呼ばれるポーランド系、リトアニア系、チェコ系、さらにはバルカン諸民族系などの白人民族集団によって構成され、組織されてきたことはよく知られている。六〇年代以降の人口変化が深刻であったという意味は、この白人住民が急激に減少するなかで、代わって増加する黒人人口を組織がいかに取り込み、保持するかという問題をシカゴ・マシーンに課したということに他ならない。先のオルスワングの指摘から見ても、デーリーをボスとしたシカゴ民主党マシーンは、六〇年代から七〇年代中頃までの間はこの変化に相当の

適応能力を示したと見てよい。しかし、その過程でマシーンが七〇年代以降、従来以上に次のように指摘され始めていたことは、その後のマシーンと黒人社会の関係さらには黒人の政治動向を考える上で示唆的であろう。以下はニューヨーク・タイムズの記者が記した一文である。「長い間シカゴ政治においては白人民族集団が重要な役割を演じてきた。……デーリーは（この白人民族集団を基礎とした――筆者注記）マシーンを、一方において白人が持つ恐怖心を和らげまた彼らの金銭的利害を尊重することによって、他方では黒人などのマイノリティが抱く夢や願望にも意を払うという、二つをバランスする方法で、規律あるそして徹底的に忠実な政治組織に洗練していった。その場合の彼の通常の手法は、黒人に職や援助を与える一方で、シカゴの白人住区と学校を、常に黒人のそれと切り離し平穏にしておくというやり方であった」[9]。

七〇年代に入って公民権運動の浸透さらには全国的なアファーマティブ・アクションの採用によって黒人中産階級が増加し、また彼らの住宅隔離政策に対する不満、教育機会への要求が増加したとき、マシーンがこのような手法で黒人住民を組織につなぎ止めておくことが年を追うごとに難しくなっていったことは想像に難くない。先にみた社会学者ウィルソンの研究は、七〇年代から八〇年代にかけて、黒人の中産階級がかつてのゲットーを離れて新しい中産階級住区に移り住もうとする動きは、六〇年代とは比較にならない激しいものであったと言う。彼の指摘は、特にシカゴを例にとって分析している点でもわれわれの当面の議論にすこぶる示唆的である。すでに述べたごとく、六〇年代から七〇年ごろの地図にみるシカゴ黒人ゲットーの領域は、いわゆるループ地区と呼ばれるダウンタウンを支点として南と西の二方に延びていた。そしてウィルソンによれば、この二地域に分かれるゲットーのとくにダウンタウンに近い九住区が、住区住民の三〇パーセント以上が貧困であるという、いわゆる黒人ゲットーでも最も過密な地域であった。しかし注目すべきは、この九住区でも、七〇年以降八〇年までの一〇年間に、推定一五万一千人にも上る大幅な人口の流失が起こったことである。流失した人口の大半は中産階級であり、彼らはシカゴ・サウス・サイドのさらに南に広がった黒人中産階級住区に移動することで、残された中心ゲッ

トー地区とは明確に異なる社会を形成しつつあると言うのである。[10]（六〇年から八〇年に至る黒人居住地域の拡大は、図1によっても顕著に読みとれるであろう）。

議論をもとに戻そう。七〇年代新しい住区に移動した、あるいは移動しようとする中産階級黒人の間に、シカゴ民主党マシーンへの不満が最も強かったことはまず間違いない。政治学者プレストンの主張によれば、デーリー市政の後半期、市長選における黒人中産階級の投票率は極端に減少したと言う。その事実は黒人住民の政治的無関心というより彼らの間に浸透しつつあったこれまでにない不満を暗示していたと言うのである。[11]

ワシントンら従来マシーンに従順であった黒人政治家の一部が、マシーン組織から距離をとり始めていくのが同様にこの時期に符合していたとすれば、彼らの政治的自立化も、やはりこの七〇年代に入って黒人中産階級に広がり始めた教育機会、職業上の差別への怒り、そして住宅環境への不満などを背景にしたものであったと想像して大きな誤りはないであろう。七五年、当時イリノイ州下院議員であったワシントンは彼の直接のボスに当たる黒人連邦下院議員ラルフ・メトカフ（Ralph Metcalfe, ドーソンの死を受けて七〇年の選挙でイリノイ州第一地区より下院に当選）にデーリーの六選を阻む市長選出馬を説いて、シカゴ・マシーンへの反逆の意図を初めて示した。そしてデーリー死後の七七年市長選では、民主党マシーン候補に対立してワシントン自身が民主党予備選に出馬した。このいち早いマシーンへの反逆がシカゴ黒人政治家の中でのワシントンの基盤を固め、のちには彼の八三年選挙戦を支える背景となった。ひとまずそのように考えてみたいと思うのである。[12]

さしあたり、これまでの議論を次のように纏めておこう。

七〇年代に入っての人口の変動、およびワシントンに代表されるマシーンから離脱しつつある政治家の台頭によって、七〇年代末の時点でシカゴ政治の構図に新しい図式が生まれ始めていたことは事実であった。黒人指導者に対して組織への忠

誠を迫りながら、シカゴの住区と人種関係の変化にはできる限りの保守的な姿勢を貫くシカゴ民主党マシーンの主流は、他方、七〇年代後半から衰退の目立つシカゴ経済の回復を、資本の再誘致で計ろうとする彼らの経済的指向においても、同様に保守的な傾向を強めていた。彼らの最大の問題は白人を中心とする中産階級のシカゴからの流失でもあった。デーリー死後、二人目の市長として七九年に市長に就任したジェーン・バーン（Jane Byrne）は、八一年以降、小さな政府の名のもとに社会福祉の削減につながる財政の縮小と行政改革を謳い、また人種関係の急速な変更に消極的であった共和党大統領レーガンを、民主党政治家としては突出するほどに強く支持する姿勢を示していた。[13] また八〇年ばかりか八四年大統領選挙でのシカゴ白人労働者票も、少なからずレーガン支持に流れたと言われる。[14] この二つの事実は、八〇年代初めの高い失業のもとで、レーガン政権への不満を強めた都市黒人活動家とは確実に相反する動きとして、シカゴ民主党マシーンが七〇年代末から辿る基本的な政治的方向性を示唆すると共に、それが引き起こすであろうシカゴ政治の亀裂を暗示するものでもあった。

こうしたシカゴ民主党マシーンの動向に対してはっきりと不満を表明していたのは、七七年の市長選で敗れた後、民主党組織から異端児化したワシントンと、八〇年の選挙で彼を連邦下院議員におしたてた一群の政治勢力であった。八〇年、ワシントンはかつてドーソン、さらにその後彼のボスであるメトカフが勤めた、シカゴの黒人政治家にとって伝統的に望みうる最高の職であった、イリノイ州第一地区連邦下院議員に選出された。この時の彼の得票は一一万九千票と、歴代第一地区下院議員当選者の得票の中でも際だって多いものの一つであった。またこの選挙戦の渦中では、ワシントンに次期市長選への再出馬を期待する声が各所で聞かれたともいう。[15] このことからして八〇年時点でワシントンが、民主党マシーンと袂を分かったシカゴ政治における新しい対抗勢力の一焦点となり始めていたことは、確かであった。

ただし七〇年代後半から頭角を現わしたこのワシントンの力が、近い将来、民主党マシーンそのものを脅かすものに拡大

するかどうかは八〇年の段階ではなお未知数であったと言うべきであろう。七七年の市長選挙民主党予備選でワシントンが得た得票は、全体投票のわずか一一パーセント（七万七三四五票）に過ぎなかった。この点から推して全市的に見ればワシントンはなお知名度が低い、シカゴ・サウス・サイドの黒人政治家であった。こうしたワシントンの特殊な基盤があるいは反映したのかも知れない、現職市長バーンは八三年市長選挙に向けての再選戦略を描く上で、相当の時期までワシントンにさほどの考慮を払っていなかった。黒人地域をいたずらに刺激することを避けたこともあったろうが、基本的にはかなりの時期まで、彼女の再選戦略にワシントンが大きな障害とは映っていなかったことはなお否定しようもなかった。ただその彼女からみてもおそらく予想をこえて当惑に価した状況は、八〇年代に入ってのアメリカ経済が再び厳しいリセッションに見舞われ、八二年の冬期には、全体の失業率が一一パーセントを越えるほどに高まっていた事実であったろう。八二年末から八三年初頭にかけて、シカゴ・トリビューン紙は、この失業状況を一九三〇年代大恐慌以来の最悪の失業率であると伝えていた。[16] 八三年市長選挙はこのような構図のもとで、八二年晩秋から本格的に動き始めた。

三　一九八三年シカゴ市長選挙

議論を進める前に誤解を避けるために、ぜひ次の点をここで明記しておかねばならない。前節で論じたごとく七〇年代末までにワシントンは民主党組織に明らかに不満を示していたが、だからといって彼の活動は、民主党からの離脱に向かったという訳ではない。八〇年、連邦下院への進出を計った彼の選挙は、シカゴ民主党組織の抵抗はあったが結局は民主党候補としての当選であった。以下に述べる八三年シカゴ市長選への立候補も、さらにはその後の彼の政治行動のすべても、シカゴ民主党組織との激しい抗争を続けながらもなお民主党の枠内にある行動であり活動である。このようなワシントンの行動

が物語る、アメリカの政党とくに民主党が孕んだ多様性あるいは矛盾は、なにも今日に始まった訳ではない。しかしそれにしても、民主党組織への反対の行動がやはり民主党の枠内で展開するという、ワシントンの八〇年代の行動を、仔細な事実過程を明らかにする前にさしあたり論理的に説明することは難しい。いまはともあれそれが事実であることを明記するだけに留めて、本論に進むこととしよう。

1

今日からみれば八三年二月二二日のシカゴ市長選挙民主党予備選に向けて、水面下における選挙の序盤戦が相当進んでいた八二年夏の段階に入っても、ワシントンはこの選挙戦への立候補を最終的に決心していなかったと言われる。[17] 盛んに誘われてはいたが、この時点では勝利に悲観的であったと伝えられる彼にとって、八二年夏から秋にかけての第一義的な政治目標は下院での再選にあった。実際一一月二日の連邦中間選挙では彼は下院再選を果たしている。ただそのときの投票は前回八〇年の高得票をさらに五万票も上回る一七万票台であったことは、彼にとっても大きな驚きであったに違いない。しかしこれとならんでセンセーショナルであった事実は、同じ一一月二日に選挙が行われたイリノイ州知事選挙で民主党候補アドレイ・E・スティブンソン（Adlai E. Stevenson）が現職三期目を目指す共和党のジェームズ・R・トンプソン（James R. Thompson）と熾烈な接戦を演じ、双方が一八一万票をとり、僅か五千票の差で選挙戦が決した事件であった。前回八〇年のイリノイ知事選における民主党候補の得票が一二〇万票弱であったことから、敗れたとはいえスティブンソンの票は、破天荒の拡大を示したものと一般に受けとめられた。そしてこの拡大の相当部分が民主党の地盤であるシカゴで起こったということも、新聞、テレビが直ちに報じた第一級のトップニュースであった。

従来民主党に忠実であったとはいえ、投票率がきわめて低かったシカゴ黒人の投票がこの選挙でかつてなく掘り起こされ、スティブンソンの得票を加増したことへの驚きを、一一月八日付けのシカゴ・トリビューン紙は次のように表現している。

このような驚くべき投票率を惹起した理由についていくつもの見方がある。「最も楽観的な見方は、新しいそしてソフィスケートされた政治への参加意識が、黒人社会に生起しているという見方である。この数カ月間選挙のための有権者登録促進運動を広い範囲に亘って展開し、新たに一〇万人の黒人登録者を引き出した黒人活動家たちは、選挙結果が当然の前進であると信じている。彼らの多くは、これが来たるべき市長選挙に向けての一つのステップであると語っている」[18]。

この一一月二日の選挙結果がワシントンの市長選出馬決定にどのような影響を与えたのかは、筆者の持つ資料では断定することが出来ない。ただ右の記事によれば、すでにワシントンを押し立てようとする黒人市長擁立に向けての動きは、この一一月の選挙前から、黒人運動家のなかでかなり具体的に目論まれていたことだけは確かである。そしていま一つ重要なことは、八三年市長選におよそ半年先立つ選挙でシカゴ黒人社会は、その方向性はなお不明であったが、もし彼らの政治行動がなんらかのまとまりを持った場合には思いがけない変化を呼び起こすかも知れない、そのような秘めた潜在的エネルギーを噴出し始めていたことであった。ワシントンが八三年市長選挙民主党予備選への立候補を発表したのは、そのような八二年一一月の中間選挙から数えて一週間後の、八二年一一月一〇日であった。

ワシントンの立候補声明によって、予備選への主要な候補者は出そろったことになる。再選を目指す現職市長として、八二年秋までに九〇〇万ドルという途方もない選挙資金を用意したといわれるバーン市長の活動は、この秋からのテレビを通じた繰り返しのスポット広告など、市政のあらゆる局面ですでに活発に展開していた。水面下の選挙戦から八二年一一月時点まで、大方の観測では、バーンの再選に対抗するのは、イリノイ州クック郡地区検事のリチャード・M・デーリー（Richard M. Daley）であろうと言われた。実際、彼の市長選立候補は、一一月二日の中間選挙が終わるのを待ちかねたかのように、翌一一月の三日であった。ここに登場するデーリーが、七六年に死去したデーリー元市長の長男として、父親の養った人脈を引き継ぐことを最も大きな政治基盤としていたことを考えれば、この選挙戦は当初は、かつての大ボス・デーリー

が死去した後に続いたシカゴ民主党マシーン内の派閥争いの再戦という様相を、まず呈していたということになる。[19] ワシントンの出馬はこのマシーン内の争いを横目で睨みながら、一一月二日の選挙で驚異的出来事と言われた黒人票を彼がいかにとりまとめ得るかを最大の課題として、以後展開していくことになる。

予備選が選挙日を一カ月後に控えて事実上の終盤戦に入った八三年の一月後半、世論調査は現職のバーンが四一パーセントの支持を受けて他の二人の候補（ワシントン、二二パーセント、デーリー、二二パーセント）を引き離し、なお有利であると伝えていた。[20] ちょうどその時期にあたる一月二三日、シカゴ地区最大の有力紙であるシカゴ・トリビューン紙は、選挙戦に重要な意味を持った社説を掲載した。市長バーンを痛烈に批判したこの社説は、八三年選挙戦の全体の様相を知る格好の資料であると共に、以後の選挙戦の推移にも複雑な影響を与えた注目してよい文書であった。「デーリーが最良の希望」と題した社説の論旨を以下に見てみたい。

われわれはますます大きな困難が予想されるシカゴの今後四年間の行政をバーン市長に委ねることに反対である。シカゴの今日の最大の問題である財政問題は、彼女に先立つ市長らの残した問題であり、バーン市長の責任とは言い難い。しかし今後の市財政の困難な状況を考えれば彼女の能力でそれに対処していけるとはとうてい思えない。政治的にひどく気まぐれであることが彼女の欠陥であるが、そのことと並んで問題なのは、彼女が、市政を自らの政治権力の構築に利用している点である。この結果、いま市内でもまた全国的にも、シカゴがなお住むに値する望ましい都市であるのか、またビジネスを行うに良好な都市であるかについて、強い不安が語られていることをわれわれは憂慮する。「ワシントンは確かに頭がきれ、また彼が、わがコミュニティの重要でかつこれまで無視されてきた人々の希望や願望を誠実に代表する」人物であることを、われわれは認める。しかし、この選挙におけるワシントンは、自ら進んで選挙戦に出馬した候補ではなかった。その故であろう、「彼は州所得税の増税および市に対する州および連邦政府のより多くの補助金の必要を、市のマイノリティ住民の福

祉を改善する手段として論じている。また彼は、選挙戦が人種問題を争点として割れぬようにと語っている一方で、彼の反対者たちを『人種主義者』と呼び」、人種問題を彼自身、選挙戦に持ち込んでいる。このようなワシントンを支持することは出来ない。われわれがデーリーを支持する理由は、一つにデーリーが「これまでのところ周辺に有能で尊敬すべきアドバイザーを集めている」点であり、いま一つ、彼がかつてのマシーンの常套手段であった秘密の裏取引を行わないと公約している点である。しかしそれらにも増して重要なのは、デーリーそして彼の家族が、シカゴを愛しそのために貢献しようという信条を持っていることである。われわれは彼の父がシカゴに、都市として必要な「実質的活動と安定」を与えた人物であったことを評価する。もし若きリチャードがその伝統に忠実であれば、彼はこの予備選挙への立候補者の中でわれわれが持ち得る最良の希望である[21]、と。

むろんこの社説だけで選挙戦の推移のすべてが論じられるわけではない。だが、この社説を素材とすれば選挙戦の起伏を幾分か具体的に推し量ることもできるであろう。以下社説の論旨に関連づける形で、二月までの選挙戦の展開を二つに分けて論じてみたい。

まず第一は、一月二三日以降のシカゴ・トリビューン紙がとったこのような反バーン・キャンペーン、デーリー支持の論調が、選挙戦に与えた直接の影響である。選挙戦への旗幟を明確にしたトリビューン紙の以後の行動は、それまでほとんど予想にもなかった有力紙の選挙戦に対する直接的な参入にも均しかった。一月末まで優勢とみられていたバーンの選挙活動が大きな打撃を受けたことは間違いない。とりわけシカゴ民主党マシーンに従来から忠実であった白人住民の間で、以後バーンの支持票はデーリー票に食われ、結局選挙では、白人票がこの二陣営にかなり均等に割れるという結末をみせた。八三年シカゴ市長選挙でジャーナリズムの動向が重要な影響を及ぼしたと言われ理由の一つも、まさにこの点を指してのことである[22]。ただ、なぜトリビューン紙が選挙戦にこれほど直接影響を及ぼすような行動をあえて積極的にとったのか。いまそ

の点は問わないこととする。

他方、指摘しておくべき第二点は、この社説で語られる議論から、ワシントン陣営の選挙戦の展開をどのように推し量るかである。社説がワシントンの選挙戦に与えた直接的な影響は判断し難い。しかしこの記事の論調を以下のように分析すれば、ワシントンの選挙戦が選挙全体で持った一つのポジションもおぼろげながら確定することができるであろう。そしてその延長で、ワシントン陣営がこの選挙戦で展開した戦術の一端も浮かび上がってくるように思う。

いま一度社説の文面に戻れば、トリビューン紙はこの文章を、かつてのわれわれがデーリー・マシーンを支持することなどは「考えられもしないことであった」と、弁解じみた言葉で切り出している。シカゴのオピニオン・リーダーを自認するトリビューン紙の八〇年代の政治的立場を考える上で、この書き出しはなるほど示唆的に違いない。注意したい点は、冒頭の弁明を裏書きするように、社説の後段においてトリビューン紙が展開するデーリー支持――この場合息子への支持――の論調は、その実、かつてのボス・デーリー時代をシカゴが安定しまた活力を持った時代として回顧する、デーリー賛歌にも均しい点である。七九年以降の不況のもとで製造業の不振また中産階級住民の一層の市外流失に悩むシカゴ経済の現状に対してトリビューン紙は、都市としてシカゴはいま、ことさらに人種問題あるいは貧困問題を争点とする選挙をする余裕はないと語っているようにみえる。シカゴ経済の回復を計るべく都市主要部の再整備を進めること、とりわけ増税などの議論を避け、市内への資本誘致を促すこと、トリビューン紙が展望しているシカゴの現代的な争点は右の二つの問題に尽きていく観が強い。しかも、トリビューン紙は、それをかなりの危機感をもって論じているようでもある。ワシントンが市財政の改善に加えて失業対策、社会福祉のために、州所得税の増税を主張していた点を問題視しているのも、そのようなトリビューン紙の危惧に関連しているのであろう。なるほどトリビューン紙はワシントンを公然と批判するキャンペーンをその後にはった訳ではない。むしろ同紙の論調の主眼は、現職バーン市長への批判にあった。しかしそれとは係わりなくトリビュー

ン紙がこの記事で展開したワシントンの政治的立場への比較的冷淡な扱いは、ワシントンの選挙戦を後押しした有力な勢力の一つであるシカゴのコミュニティ運動家、特にゲットーの失業問題あるいは社会福祉問題に関心を抱くグループの反発を買うものであったことは少なからず想像できるであろう。

けだし、われわれはいまトリビューン紙の先の社説を、八三年時点でのシカゴの中心的な政治潮流であった立場、それを伝統的な意味において保守的と呼ぶことが適切であるか否かはさておき、レーガン政権が言うところの、経済の活性化をもたらすために社会福祉の抑制もさしあたり耐えるべきと説いた議論によく似た、保守的色彩の強い政治論調であり経済的立場であったと理解したい。そして選挙戦が白熱した直中においてシカゴ・ジャーナリズムがみせたこの種の議論は、ワシントンの選挙戦を後押ししていたリベラルやコミュニティ運動家の反発を呼び、彼らの活動をいっそう活性化したとみることには、一応の合理性があると思えるのである。

2

いずれにせよ、先にみたシカゴ・トリビューン紙の社説はワシントンの選挙戦に直接的なマイナス影響を与えなかったようにみえる。いなむしろこの八三年一月の時期からワシントンの選挙戦は当初の出遅れをカバーするように、盛り上がりをみせ始め、終盤には暑い熱気に包まれていった。この事実を説明するには、さらに議論の枠をいま少し広げてみなければならない。

事実過程が多少前後することになるが、八二年一一月後半ワシントンが選挙戦に立候補を声明した初めの時点では、彼が黒人票をどの程度に纏めうるかは実のところ五里夢中であったと言ってよかった。報道機関はワシントンが黒人票の八〇パーセント以上を取り込まない限り、勝ち目はないと伝えたが、先のトリビューン紙の社説がでた八三年一月後半時点での世論調査は、黒人層におけるワシントン票がまだ四〇パーセントに達した程度であろうと推定していた。[23]

なるほどシカゴ黒人社会がバーン市政に不満を抱いていることは八二年夏からすでに広く伝えられていた。その切っ掛けになった事件として、八一年バーンがシカゴ教育委員会の人事に介入して黒人運動家が留任を求めた黒人教育委員を白人に据えかえたこと、さらに八二年夏にはシカゴ市住宅公社の二人の黒人理事を更迭した人事が、バーン市政に対する黒人社会の不満を広げていると伝えられていた。実のところ八二年夏からの黒人団体による有権者登録運動は、この二つの事件に反発する地域運動家の呼掛けで始まった。[24]

「市長は黒人社会への約束を果たさなかった。黒人社会は七九年の選挙において彼女を支持したにも拘らず、以後の彼女の行動は、われわれ黒人に対してはなはだしく無神経である」。八三年二月一日付のシカゴ・トリビューン紙はこのように、シカゴ黒人社会で語られたバーンに対する不満を報道した。「本紙が行ったウェスト・サイド黒人街におけるインタビューで最も頻繁に語られたテーマの一つは、誰が市長になろうと、市長は黒人社会と白人社会の双方に対して、公平で平等でなければならないという主張であった」。記事はこのようにも黒人ゲットー、ウェスト・サイドの動向を纏めている。ただし、この記事は右のようなバーン市政に対する不満にも拘らず、この地区における選挙の形勢は、一月末においてもワシントンとバーンの支持率がなお半ばしている状況であるとして、決してワシントンの選挙戦が有利であるとは伝えていなかった。ウェスト・サイド住民の二一パーセントがワシントンをよく知らないとインタビューに答えていたというのである。[25]

おそらく、右の状況の一つの背景でもあったであろう、実のところ一一月のワシントンの立候補は、シカゴ黒人社会における既成政治勢力の過半の支持を受けたものでもなかった。八二年時点で市会に議席を持った黒人市議一六名の内の実に一三名までが、市長バーンへの忠誠を誓っていた。黒人社会に対してバーンと民主党組織が持った締め付け、吸引力は少なくとも黒人社会の上部政治組織ではなお相当程度のものであったと言うことができるのである。[26]

多くの黒人市議が組織の締め付けに係留されてワシントンの立候補に背をむけたままの状況で、しかもシカゴ全体を眺め

れば黒人社会においての知名度もまだ高いとは言えなかったワシントンの選挙戦をその後支えまた盛り上げたのは、選挙戦一月後半から二月初めにかけて四回に分けて行われた候補者テレビ討論会での、ワシントンが示した冷静かつ「明晰な」能弁さであったといわれる。[27] また同時に、バーンの選挙戦が一月末からシカゴ有力紙の激しい攻撃をあびて勢いを失ったことは、黒人政治家の一部が民主党組織の締め付けから相対的に離れ易くなったという意味から、ワシントンの選挙戦に間接的に有利に働いたことは間違いなかった。シカゴ黒人社会の中産階級は、この時期から密かにささやかれ始めた黒人市長誕生の可能性に、彼らの人種的プライドを揺さぶられ始めた。しかし中産階級とは別に貧困地域においてのワシントン陣営への傾斜には、やはりそれ以上の要素あるいは働きかけが必要であったように見える。その切っ掛けが実際どのようなものであったかを今日正確に区分けして説明することは決して容易ではない。しかし結果からみれば、ワシントン陣営はその切っ掛けを、黒人貧困地区住民を刺激し、彼らの人権意識をかき立てることで民主党組織の係留を断ち切らせるような、いかにも劇的でまた具体的な働きかけであり、行動の呼掛けであると捉えていたように見える。その意味で選挙戦にはやはりはげしい駆け引きとレトリックのやりとりがあった。最後にそれを列挙してみよう。

厳しい失業と地域機関の荒廃の進む貧困地域を、コミュニティ運動家がワシントン支持の取り付けに走り回った住区レベルでの活発な宣伝活動が、おそらくワシントン選挙戦の最も基盤になる運動であったろう。またこの他にも黒人教会への働きかけが重要であったと言われる。加えて一月末から、相次いでシカゴの有力紙（トリビューン紙に続いてその後シカゴ・サン・タイムズ紙）がデーリー支持を明確にしたことへの反発、これらの要因が互いに増幅しながらワシントンの選挙戦を一月末から二月にかけて、盛り上げていった。そしてこうした盛り上がりの頂点に、二月の初め、ワシントン陣営が企画したイリノイ大学シカゴ校舎での一大決起集会があったといわれる。ワシントンの支援に駆け付けた著名な全国的黒人指導者を含めて黒人参加者の波で埋まり、シカゴ黒人の魂に呼びかけるようなソウル音楽と宗教的な呼掛けが、集会をおおったと伝えられた。

ワシントンの選挙戦が、階層の別なく黒人の精神的、行動的独立を謳いあげ、シカゴ社会における黒人、またマイノリティの名誉ある地位を求めるという、さしずめ黒人社会全体を巻き込んだような「十字軍的」運動に変貌したのは、実にこの集会が切っ掛けであったと評されるのである。[28]

ついでながら予備選と平行して行われた市会議員選挙においてもワシントン陣営は、彼の立候補を批判する黒人現職市議に対して独立候補を支援することによって、既成黒人政治勢力の切り崩しを計っていた。

こうして二月後半、民主党予備選挙は一月末と異なり、トリビューン紙などの反バーン・キャンペーンによって苦境にたったバーンをワシントンが急追する様相で、いずれの紙誌も全く予想のつかない混沌とした状況で選挙日二二日を迎えた。結果はワシントンが全投票数の三六・五パーセント（四二万四一四六票）、バーンが三三・五パーセント（三八万八二五九票）、デーリーが二九・八パーセント（三四万四七二一票）を得るという結末で終わった。[29]（確定済選挙結果の詳細は、本論末尾に付録として掲載した表4および図2を参照）。報道各紙は、ワシントンが彼の善戦の目安とされた黒人票の八〇パーセント以上を実際に獲得したことを驚きをもって報じた。以下はニューヨーク・タイムズの社説である。「ワシントンはいかにして勝ったのか。彼のエネルギッシュで知的なキャンペーンを挙げるまでもなく、彼が、有権者の感覚に流れた人種的な意識と、いまひとつ白人候補の分裂よって明瞭な利益を得たとみることは容易である。しかし実のところ彼の成功にとって最も重要であったのは、昨年の夏からおよそ二〇万人もの新規の投票登録者を獲得した、彼を支持する屈強な組織の活動であった。ワシントンはこの運動を背景に、黒人票の八四パーセントと白人票の六パーセントを得て、一位に当選した」。[30]

民主党予備選に票を投じた有権者の投票率は、予備選挙としては際だって高い、シカゴ登録有権者の七七パーセントにも及んだ。しかし、ニューヨーク・タイムズの右の論評が指摘するように、選挙においていま一つ重要であったのは、実際に選挙日に投票できる選挙登録を行った有権者が八二年夏からの黒人コミュニティ運動家らの働きかけによって、二月の選挙

までの間に通例の選挙に比べて約二〇万人も増えたことであった。概算であるが、八三年民主党予備選挙時点で登録していた黒人有権者は、この前年夏からの二〇万人の増加を見込んでおよそ六五万人ほどであったと推定されている。この数字は、黒人登録者が、従来白人に比べて大幅に少ないという常識を覆して、シカゴ登録者人口の四〇パーセント、つまりシカゴ総人口に占める黒人人口の割合にほぼ相当する率に達したことを意味した。過去の民主党予備選における投票者の全体数がおよそ八〇万人であった事実から推測すれば、八三年予備選挙の実際の投票数、三候補の合計で一一五万六千票は従来よりも三五万票も多かったことになる。これほどの投票総数の増加は単に投票率が高かったと言うだけでは確かに説明できないであろう。投票率もさることながら、投票率の前提となる登録有権者が増加した事実、言葉を換えればニューヨーク・タイムズ紙の言うワシントン支持陣営が八二年後半から運動の中心にすえてきた新規登録者の登録促進運動が、選挙結果に大きな影響を与えたことが十分理解できるのである。[31]（なお付録の図2は、ワシントン、バーン、デーリーがそれぞれ得票において優位を占めた地区が、シカゴの三つの地域に鮮明に分かれていた事実を示して興味深い。この内ワシントンが一位を占めた地域は、図1でみたシカゴの黒人居住地域にそのまま重なるものであることは言うまでもない）。

3

ワシントンの勝利について関連する分析を後にして、その後の事実をいま少し記しておきたい。

八三年のワシントンの場合、二月二二日の民主党予備選における勝利は、一カ月半後の四月一二日に行われたシカゴ市長選挙（以下これを本選挙と呼ぶ）の勝利を直ちに決定づけたわけではなかった。（シカゴに限らず今日、アメリカ大都市における市長選挙はまず二大政党の候補者を決める予備選挙があり、その後に各党の正式候補者および指定された数の推薦者署名を集めた「独立候補」による本選挙が行われる）。六〇年代以来、民主党予備選挙の当選者が本選挙に楽々勝利することがほとんど慣例化していたシカゴにとって、ワシントンが本選挙で共和党候補の激しい追い上げを受けたことは、まさに異様と表現する以外の何物でもなかった。とくに二月二二

日、民主党予備選挙に投票した有権者数が右にも記した通り一一五万人強（シカゴ市の推定有権者はおよそ一五〇万人）であったのに対し、同日、共和党候補バーナード・エプトン（Bernard Epton）が共和党予備選挙で得た得票が、わずかに一万一千票余りであったことを知ればなおさらであろう。

しかし四月一二日の本選挙結果は、ワシントンが六六万八一七六票をとって当選したが、エプトンも六一万九九六二票を得、その差は僅か五万票であった。[32]（得票の詳細は付録の表5および図3を参照）。

右の数字から当然推測される通り、四月の市長本選挙が緊迫化した最大の理由は二月二二日の予備選後、シカゴ民主党マシーン組織が、ワシントン支持で固まらず選挙戦をサボタージュしたこと、いなかなりの部分が共和党候補の支持に転じたことに起因した。予備選以後エプトン支持を公然と明らかにした民主党市会選挙区組織だけでも、八つを数えた。そのすべてが圧倒的に白人居住区の組織であったことは、四月の市長選挙を確かにある種の人種戦争にも似た争いに変質させた。選挙後の論評の多くがアメリカ都市政治史上でも希なほどに、醜悪な人種主義の横行した選挙であったと評したごとく、三月中旬からの選挙戦では、黒人市長の当選を是が非でも阻むというむき出しの人種感情が市内白人住区のいたるところで露出していた。選挙結果は実に黒人票の九八パーセントをワシントンがとったのに対し、エプトンは白人票の八一パーセントを集め、文字通り「人種の区分」によって分かれていた。[33]右の選挙結果の中で選挙後に改めて関心を集めたのは、ワシントンがそれでも白人票を一八パーセント獲得したことと並んで、彼に対して予備選挙時にはほとんど関心を示さなかったシカゴ人口の中のいま一つのマイノリティ・グループ、ヒスパニック系住民が、本選挙で七二パーセントという高い割合でワシントンを支持したことであった。[34]

ただし、人種意識が選挙の最終的な投票の選択を決定するのに大きな意味を持ったことは疑いなかったが、予備選挙時からワシントンが示した民主党マシーンに対する攻撃とそれへの民主党組織の反撃が、この本選挙における民主党の分裂状況

とも擬される事態の根底にあったいま一つの要因であったことは、ここであわせて指摘しておくに値する問題であろう。

二月二二日の予備選挙を結果から判断すれば、民主党組織がバーンとデーリーの間で二つに分裂したために、ワシントンが漁夫の利をさらったと見る見方も一概に否定できない立場であった。少なくともこの選挙を切っ掛けに、シカゴ民主党内の対立図式がいまや組織内の有力グループ間の抗争から、ワシントンという新勢力と組織全体との対立という図式に一挙に置き換えられた点をみれば、八三年シカゴ市長選民主党予備選挙はなるほど、民主党組織にとっても大きな転機であった。もとよりこの構図の転換はワシントンも十分に予想していたことであった。予備選挙以後のワシントンの民主党マシーン批判はさらに積極的であった。彼は次のように語っている。「シカゴはいま分裂している。しかし、この都市はすでに以前から長らく分裂していたのである」。その分裂の理由は、一つに「民主党マシーンがこれまで市政を牛耳るために巧みに舵取りした、分割征服という戦術の故である。民主党は市政をわがものとし、その巨大な官僚機構の中級管理職から政策レベルの職まで、組織が自由に操る公職を不当に分配してきた」。彼らが独占してきた政府は、「閉ざされた政府であったのであり、多くの住区住民の利害を無視し続けてきたのである[35]」。

右のワシントンがかざす主張を座標とすれば、四月の本選挙とはなるほどワシントンと闘う一方の主役が表向き共和党候補のエプトンであったが、その実、ワシントンの予備選挙勝利のために組織の枠外まで吹き出た民主党内の権力闘争が、共和党候補を借り物のように巻き込んで改めて四月にぶつかりあっていた、そのような実態の選挙であったと意義づけても大過はなかった。ただそう見たとしてもこの選挙がやはり異常であったことに変わりはなかった。言うまでもない、その異常さの最も大きな理由は、一方の民主党組織が頭に他党の候補を担いでも闘いを続けるという、通常の選挙では考えられないすさまじいほどのプラグマティズムと執念を見せた点であった[36]。（ワシントンの本選挙での勝利が辛勝であったことは、付録の図2と図3を比較しても容易に知れるであろう。ワシントンは得票において一位を占めた地区を、予備選から本選挙にかけて一つも増していない。つまり予備選でバーンと

デーリーが一位を占めた地域はそのままエプトンにそっくり移っている)。

そうであればなおのこと、実はこの抗争は、四月の市長選挙によっても決着がつくはずのない闘いであった。市長選挙と平行して行われた市会五十議席の改選では、民主党系議員が五十議席を依然独占したが、ワシントンに公然と反対する民主党マシーン主流派が二九議席と多数を占め、改選後はバーン前市長の選挙参謀を勤めたクック郡民主党組織議長エドワード・ボルドリアック（Edward Vrdolyak）のもとに統率された行動を執った。選挙後ワシントン市長派に流れた二一名の議員（この中には一六名の黒人市議全員が含まれた）とこれに対峙した民主党組織派二九名との抗争は、ワシントンが市長に就任した八三年四月末からさしあたり八六年四月までの間、議場で激しく罵倒しあうばかりか、シカゴ市政のあらゆる局面において深刻な権力闘争を繰りひろげた。[37] 市長選挙から八カ月後になる八三年一二月、ニューヨーク・タイムズ紙は、シカゴ市政に展開する抗争状況を改めて次のように報じている。

「一二月一七日シカゴ市会は前例のない行動を執った」。市会は市長が提出した予算案を反故にして、市会財政委員会が代わりに作成した来年度予算案を市会多数の票決で可決した。「市会が通過した予算案は、市庁各省の支出水準を定めると共に、市長スタッフの給与を削減し」、かつ「明確な理由のない」市職員の解雇を禁じている。市会の投票は二九対二一と、完全に党派的な区分に沿っていた。かつてデーリーのもとで一枚岩であったシカゴ民主党は今や事実上二つの政党に分裂したようにみえる。[38]、と。

八三年以降シカゴ市政を舞台に続くこの激しい権力闘争は、もとよりその基底においては、大都市として急速に変貌するシカゴが八〇年代に直面したさまざまな政治的、社会的さらには経済的諸問題を複雑に内包した争いであるに違いない。しかしここではわれわれはさしあたりこの闘争が、八三年以降、八七年のワシントンの再選後も、また彼の死後の今日においても続いていることだけを記すに留めておこう。われわれの残る関心は、争いの意味を将来明らかにするためにも、さしあ

たりこの闘いの一極であるワシントン陣営に集まった勢力グループをいま少し仔細に眺め、彼らの組み合わせと結合の意味について現在われわれが出来得る限りの分析を試みることである。

四　運動の構成と起伏

1

手元にある資料から、八二年一一月一〇日シカゴ市長選立候補声明以後のハロルド・ワシントンの発言を、重要な節目ごとに拾ってみたい。立候補時から八三年四月一二日の市長当選そして同年四月二九日の市長就任時、さらにそれから四年後、八七年四月七日シカゴ市長選挙におけるワシントンの再選、同年五月三日の第二期ワシントン市政発足時が、ここでいう節目である。これらの時期のワシントンの発言を連ねることで、ワシントンと彼を中心に集まった政治勢力の抱えた課題あるいは彼らの運動の論理とその実態を多少とも素描することが出来れば、それなりの意義を持つであろう。

なお八三年四月の初当選に至るワシントンの選挙戦は、通常の意味での選挙というより「運動（ムーブメント）」であったというのが、八〇年代半ばに出された若干の政治学者の評価である。[39] なるほど八二年夏からの有権者登録運動に始まり、四月の選挙でシカゴ黒人有権者投票の実に九八パーセントを集めるまでに黒人社会を糾合した彼の選挙戦は、黒人市長の当選という当初は遠く見えた目的に向けて幾重にも支持者を広げた、その意味での政治集団をさまざまに結び付けたある種の運動と見てもおかしくはなかった。一一月、ワシントンの市長選立候補には、ジェシー・ジャクソンが主宰する組織プッシュ（PUSH）、あるいはブラック・ナショナリスト、ルー・パーマー（Lu Palmer）が新たに組織したシカゴ黒人統一コミュニティ（CBUC）などという、シカゴを本拠としたリベラルないしはブラック・ナショナリスト系の黒人団体からの強い働きかけがあった。

またこのほかにもコミュニティ活動家あるいは黒人社会運動家が展開するさまざまな草の根の大衆団体が、八二年中頃から精力的な活動を示し、ワシントンの選挙戦でも活発な役割を果たしていたことは、すでに選挙時からよく知られていた。たとえば、八二年夏からの投票者登録運動に最も大きな役割を演じたのは、この夏に結成され、失業者と生活保護受給者を呼びかけ対象としたパワー（POWER「福祉と経済改革のために組織された人民」）と呼ばれる団体でもあったという。[40]

しかし他方で、そうしたコミュニティ活動家とははなはだ毛色が違う黒人実業家の政治資金と人材が、実のところワシントンの八三年選挙戦を支えたいま一つの基盤であったことも、すでに確認されている興味深い事実である。なお、その点に関連してさらに付言すれば、市長就任後のワシントンは、彼の堅実な財政運営によって黒人実業家ばかりか、シカゴ実業界一般とも良好な関係を保持したと言われる。[41] さしあたりこれらの諸点を念頭において以下議論を進めてみたい。

立候補以降、市長選までのワシントンの選挙戦の基調をなした中心の主張は民主党マシーンに対する攻撃であったが、この主張をワシントンが用いたいま一つの修辞的な言葉で置き代えれば、それは「閉ざされた政府」批判とも言うべきものであった。これまで利用されるばかりで、そのじつ重んじられることのなかった「外」におかれた人々が、「閉ざされた政府」に対して示す抗議、いうならばこの種の告発の論理が、ワシントン立候補の大義として先頭に掲げられ、いまこそわれわれは閉ざされた政府の扉をこじ開けようという呼掛けがあとに続いた。当然のことながらこの内と外という感覚には人種関係が実体感を与え、ワシントンの選挙戦は、長い黒人差別、マイノリティ軽視の歴史の克服という文脈にのって、集合的な合理性を帯びるという論理の組立であった。ちなみにワシントンが立候補からまもない時期に語り、その後の彼の支援集会においても常にスローガンとして使われた「今度はわれわれの番だ」という発言は、次のような文章の後に添えられた文句であった。「われわれは何年もの間惜しみなく、いずれ白人の候補者がわれわれをこの政府のプロセスの中に加えてくれるであろうと期待して、彼らに票を投じてきた。しかし、『いやそれではだめだ、今度はわれわれの番だ。われわれの番が来た』

と、言う時がいま訪れたのである」[42]。四月の投票日に爆発的といってよいほどの黒人票がワシントン支持に集まったことからして、この外なるものあるいはマイノリティの挑戦というレトリックが、黒人票を社会階層にかかわりなく一挙に飲み込むというワシントン陣営がたてた選挙戦略に、ほぼかなう効果をあげたことはまず疑いなかった。

このような選挙戦略は、当然のことながら八三年ワシントンが掲げた政治課題にも、いくつかの改革的目標が重要な位置を占めるという形で反映していた。二月二二日の予備選勝利の後、ワシントンがシカゴ市政の課題として示した具体的な目標とは次のものであった。(1)肌の色、人種、さらには信条のいかんを問わずすべての人々が、公平に、また平等、公正に扱われる、開かれた政府を獲得すること。(2)何千という人々に仕事を提供すること。(3)公的サービスが不足し不平等に扱われている住区を再生すること。(4)実業のシカゴ外への流失を防止すること。(5)シカゴの政治マシーンの生命源である、市庁の役職者、職員の悪名高い政治的任命を廃止すること[43]。ちなみにワシントンはこの目標を、四月一二日市長当選時にも次のような項目として繰り返している。(1)シカゴ民主党組織を牛耳るマシーンの打倒。(2)政治的斟酌による市職員の採用あるいは解雇の廃止、その一方、マイノリティの採用枠を確保するアファーマティブ・アクションの十分な活用。(3)行政の第一義的課題として、これまで資金や公共サービス面で差別されてきた住区に対する重点的な資金の投下、「強力な住区発展計画」の推進。(4)また市公共住宅計画の見直し、低所得者用住宅の拡充。(5)マイノリティ住民に不公平であると批判される市警上層部の人事刷新[44]。

紛れもなく以上のような選挙戦と政治目標からみれば、八三年、ワシントンは新しいシカゴ市政、とりわけ失業問題と、見捨てられたシカゴの住区への新しい政治的手当を約束する改革者としてのポーズをまとって、市政の壇上にのぼった政治家であった。

しかしこのような改革目標を掲げた一方で、四月二九日、市長就任式に臨んだ折の演説では、彼の市政が以後四年間に直

面する決して平坦でない環境と、またそれへの多様な対応手法を暗示するかのように、論じるところにおいてもまた掲げる目標においてもワシントンは極めて慎重であった。新聞の報じるところこの演説の大半をワシントンは、逼迫する市財政の説明で費やしたという。要旨はこうである。市の財政状況は当初われわれが予想した以上に悪い。八三年時点で、市の一般会計には一億五千万ドルの不足が、市交通局財政には二億ドルの赤字が生じることが判明した。この状況を乗り切るためには直ちにかなりの職員の削減が必要であり、また州所得税の増税が必要である[45]、と。

ワシントンは右の就任演説を市民に統一を訴えると共に、すべての人に公平で平等である市政の樹立を目指すという選挙時から語った誓いで締めくくっていた。しかしこの後、彼の八三年から八七年にかけての市政がさしあたり彼がこの第一期就任時に指摘した財政問題という壁の前に、強力な住区発展計画においても、あるいはまた低所得者用公共住宅の改善といった面でも、彼の八三年選挙時に掲げた目標を大幅に後回しにせざるを得なかったことは、四年後のワシントン市政への一般的評価からしてまず動かし難い事実であった。いささか時間が飛ぶが、八七年四月一九日付けのニューヨーク・タイムズは、ワシントンの再選の後、シカゴ市会がワシントンの第一市政期を苦しめ続けたボルドリアック派の崩壊、彼らの多くの市長支持への鞍替えによって、ワシントン市長派が圧倒的多数を占めるという第一期とは様変わりした状況に変化したことを伝えた。しかし、この記事は、そうであればこそ実は第二期にこそ、これまで改革を唱えてきたワシントン市政の真価が問われるであろうと結んだ。第二期にこそ、「ワシントンがこれまで語ってきた改革の修辞が、真実のものであるか否かの試練に晒される」という見方で、彼の支持者も反対者も一様に同意しているというのであった[46]。

ワシントンの第二市政期は、八七年五月このような評価のなかで始まった。しかし、そうだとすればまことに残念であったがわれわれは、ワシントン市政の改革が真に試されたはずの時期を、思いがけない彼の死によって失うという結果に直面することとなる。八七年一一月二五日、ワシントンは、心臓発作のため執務中にたおれ、数時間後に急死した[47]。彼の第二期

市政はしたがって評価の対象にならない。とりあえず彼が八七年五月第二期市政をスタートするにあたって語った若干の抱負を、彼の最後の発言として次に引きたい。

彼は第二期の最大の抱負はシカゴ市政を真に改革することであると語り、いま自分はそのために十分な力と市長としての経験を持ったと自信のほどを漏らしていた。第二市政期にはとくに大都市に対する連邦政府の援助を働きかけるため、全国政治でも積極的役割を演じたいと語るワシントンは、シカゴ市政の当面の目標のうち最も大きなものの一つは、中産階級がシカゴから流失していく現象をくい止めることであり、そのために市の建築規制を改正することが急務であると語っていた。ダウンタウン周辺の旧工場地域を高級な住宅地域に再開発し、またミシガン湖畔沿いの住区を再整備することによってすでに中産階級の流失は相当程度にくい止められたとワシントンは評価した上で、現在立案中の建築規制の改正によって市内住宅地域の再開発が進めば、より多くの中産階級がシカゴに留まるであろうと抱負を述べていた。[48]

ちなみにこの発言からは、低所得者用公共住宅の改善、あるいは低所得者住区の再建といった、八三年市長初当選時にワシントンが語った中心的目標が、陰を潜めていたことが幾分気になる点であろう。ニューヨーク・タイムズの記者ディック・ジョンソンは、この時点でのワシントンの印象を、今や民主党組織を完全に屈服させ、シカゴ市政の権力を集中したことによって、ワシントンはさながらかつてのデーリーの再来のごとく見え、彼自身そう呼ばれることを嫌がっていないようにみえると記していた。[49] また、一一月二五日ワシントンの急死後にでたニューヨーク・タイムズの社説は、ワシントン市政のもとで都市貧困者の住宅状況、さらには黒人、マイノリティ住民の多くが通う公立学校教育の荒廃状況は改善されることがなかったと記し、シカゴ政治史において幕を閉じたワシントン時代は改革という意味では結局さしたるものではなかったとした。むしろ「ワシントン市政が何かをもたらしたとすれば、今日の都市にとって貧困者の問題は、人種をはるかに越えた問題であるという事実が、浮き彫りになった点である」と社説は、ワシントン市政に対して見方によれば極めて手厳しい

評価で結んでいるのである。[50]

しかし右のような評価を下すのであれば、われわれはいま一度、ワシントンが再選間もなく急死したこと、したがって彼の市政はあくまで未完のものであったことを、公平のために記しておかねばならないであろう。シカゴ市政最初の黒人市長として改革を標榜したハロルド・ワシントンに対する評価は、彼の市政が同時にさまざまな政治勢力を結合し糾合していく運動という性格を帯びたという点で、この政治連合に糾合された諸要素が今後アメリカ都市政治にどのようなインパクトを与えていくかを見た上でしか、総合的な判断を下すことは難しいのではないか。先のニューヨーク・タイムズの評価はすでに歴史化したワシントン・シカゴ市政の意義の重要な一面を鋭く捉えていることを筆者は否定しないが、なお総合的という意味では時期尚早な結論のように感じる。さしあたり筆者は、一九八三年から八七年までのワシントン市政への評価を以上の意味でなお留保したいのである。

2

しかしそれにしても八七年末まで、ワシントンが率いた市政は、はなはだ多様な勢力によって構成され、また彼の市政を支える運動も多面体にも似た複雑な位相を持った政治運動であったことは、いま一度改めて確認しておくべき事実であろう。以下われわれは、八七年、ワシントンが再選を勝ち得た彼の二度目の市長選挙を簡単に概観して、この節を締めくくってみたい。この八七年選挙の結果や選挙に関連する若干の言動からも、ワシントン市政がいかに多様な位相を持ったかを読み取ることが出来るであろう。

言うまでもない、八七年選挙の基本的な構図は、ワシントン第一市政期を特徴づけた、ワシントン市長とこれに対峙する民主党マシーン勢力の再度の対決であった。この選挙戦に挑む戦術を構築するに際し民主党マシーン勢力は、ワシントンへの対立候補が二人に割れた場合勝算がないという、八三年選挙の教訓を配慮した。二月二四日の民主党予備選には前市長

ジェーン・バーンが立候補し、反ワシントン勢力はこのバーン支持でひとまず一本化した。二月の予備選後は、第一期ワシントン市政に対する市会での最も強硬な反対者ボルドリアックが四月の市長選に独立候補として立候補し、民主党候補ワシントンと争った。しかし結局いずれの選挙も、選挙日のかなり前から噂されたワシントン有利という予想は揺るがなかった。[51]

二月の民主党予備選におけるワシントンの得票は五七万三九六二票（全体投票の約五三パーセント）、バーンのそれは五〇万四二七五票であった。ワシントンは黒人票の九六パーセントを取ったばかりか、前回八三年二月の予備選挙に較べればかなり増加した二一パーセントの白人票を得た。八〇年代後半、シカゴ人口の中で最も増加の著しいヒスパニック系住民の間でのワシントン票は、五一パーセントと、これも八三年の民主党予備選挙時に較べれば大幅な増加を示していた。投票率について二月二五日付けのニューヨーク・タイムズは、前回八三年の予備選時に較べて白人地区の投票率が幾分減少したのに対し、黒人地区の投票率はまたしても極めて高かったと伝えている。全体の投票率も、七六パーセントとやはり高い率であった。[52]

いま筆者はここで細かい数値を挙げる余裕はない。しかし、シカゴ・トリビューン紙が予備選挙後に掲載した市会選挙区別の投票結果（表3）を検討すると、八七年選挙の最大の特徴は、八三年と幾分異なり、選挙の初めからシカゴ黒人社会がワシントン支持に圧倒的に結集したことであった。八三年の場合には、予備選挙時におけるワシントン票は、その最大の基盤を中産階級においていた。シカゴの貧しい黒人地区の票は、なるほどワシントンを支持しはしたが、中産階級地区のワシントン支持票には及ばなかった（ゲットー地域においては民主党マシーンの締め付けが強かったこともわれわれはすでに見た）。しかし、八七年の選挙では予備選挙の時点から、シカゴ黒人社会は一丸となってワシントン支持にまとまり彼の再選を支えた。黒人中産階級地区と、いわゆる貧困地区との間にワシントン支持率の差はほとんどなく、まさにワシントンは彼自身自信を持って語ったように、シカゴの黒人票をこの選挙ではほぼ確実に彼の手中に収めていたと言ってもよかった。[53]

だが、八七年に出現したこのようなワシントン支持票の強固な凝集力は、おそらく、ワシントンという八三年以降シカゴ

黒人社会のシンボルにも似た存在にして始めて纏めることのできた、それなりに複雑な社会層の連合であったことは、次のような若干の資料によっても傍証できる。八七年の選挙戦に先立ってイリノイ大学の社会学者アブディル・アルカリマが発表したワシントン再選支持の論文（八六年一二月発行）は、八三年以降シカゴ黒人社会の左翼勢力（より正確にいえば、八〇年代アメリカにおいて社会主義を標榜する黒人政治勢力）の、ワシントン支持の論理を説明している点で興味深いものであった。彼が記す主だった論点を以下簡単に拾ってみたい。

表3　1987年シカゴ市長選挙民主党予備選挙結果[ア]

（ワード別）

Ward	Washington	Byrne	×[イ]	Washingtonの得票率（%）
1	11,455	8,048	※	58
2	17,801	458	※	97
3	19,610	227	※	98
4	18,976	949	※	95
5	22,354	1,196	※	94
6	31,304	294	※	99
7	14,356	2,497	※	85
8	28,714	388	※	98
9	19,907	967	※	95
10	8,328	14,367		36
11	4,303	17,874		19
12	3,261	17,524		15
13	1,298	31,727		03
14	3,147	19,691		13
15	17,768	4,965	※	78
16	20,793	261	※	98
17	24,493	254	※	98
18	14,898	15,703		48
19	6,150	23,815		20
20	20,712	221	※	98
21	29,263	306	※	98
22[ウ]	3,831	3,801	※	49
23	1,127	29,170		03
24	21,212	177	※	99
25	3,960	5,604		41
26	8,927	5,658	※	60
27	13,498	2,278	※	85
28	17,226	141	※	99
29	18,883	1,117	※	94
30	4,851	15,018		24
31	7,660	5,898	※	56
32	4,831	11,164		30
33	4,248	14,186		22
34	26,000	327	※	98
35	2,690	15,561		14
36	1,958	26,248		06
37	19,482	816	※	95
38	1,522	26,271		05
39	2,960	17,434		14
40	3,395	13,350		20
41	2,005	28,280		06
42	9,844	10,928		47
43	8,575	14,372		37
44	9,155	12,661		41
45	1,950	26,013		06
46	8,866	7,934	※	52
47	4,036	15,905		20
48	8,808	8,159	※	51
49	8,608	8,193	※	51
50	4,500	14,956		23
合計	573,499	503,352		53

ア）この結果は1987年2月26日のシカゴ・トリビューン紙に掲載されたものであり，開票率は100%をやや割る非公式のものである。
イ）※はワシントンが一位を占めたワードを表わす。
ウ）この選挙には，僅かな得票をえただけであるが，第三の立候補者が存在した（Sheila Jones，総得票数2510票）。22区でワシントンの得票率が50%を割っているのはそのためである。
典拠　"Results by Ward of Democratic Primary for Mayor," *Chicago Tribune*, Feb. 26, 1987, p. II2 より作成。

アルカリマは次のように論じている。

これまでワシントンが民主党組織から独立することが可能であった「社会的基盤は、長期に亘ってシカゴ社会の草の根で活動してきたコミュニティ活動家とワシントン市長の長年の盟友達が共同で率いた、『草の根委員会』と呼ばれる市民規模の新しい政治連合である」。八七年選挙におけるこの組織の「役割は、再び黒人社会においての有権者投票登録を八三年選挙時の水準まで引きあげ、また同程度の投票率を獲得することである。加えて白人、およびラテン系住民から支持を得ることも重要である」。このような運動の展開が、選挙戦に臨む二陣営の対抗関係の公的な性格を規定している。ワシントンがかねてから、すべての人々に対する公平さを強調してきたのはこの基盤の故であり、実際彼はその約束を、いままでに比較すればはるかに改善された各住区への資金の公平な分配や、アファーマティブ・アクションの積極的運用という面で具体的に実行している。しかしながら、同時にわれわれが明記すべきは、ワシントンが、シカゴ実業界とも良好な関係を保ち、実業との「パートナー関係にも意欲的な点である。この関係は、シカゴの問題を解決する手段に保守的なモデルを導入することを助けている」。われわれは次のようにワシントン支持の意義を考えたい。「ワシントン市政は深刻な問題に直面している。シカゴ市政が赴くところ、政治運動と市政が一体化していく、いわゆる腐敗が常に前途に危険として横たわっている。政治組織が社会改革の手段でなく目的となり、社会変化のために闘い続けるよりも利権を得ることがより重要になるという危険がそれである」。「ワシントンの勝利を目指す人民の運動は、民主主義をいっそう押し進めるためのより大きな運動に発展するという確かな機会を持っている」。民主党を打ち壊し、新しい独立した政党を組織し、そのもとで新しい全国的な政治運動を構築するという課題がそれである[54]、と。

黒人政治運動の左派はワシントン市政をこのように見ていた。彼らが言う民主党の一部勢力を取り込みながら、将来民主党を打倒しようという論理は、ここでは幾分異なる政治次元の問題であるが、さしあたりこのような立場のアルカリマも支

持したという意味で、ワシントン市政の位相はやはりすこぶる多様であったと言う他はない。そしてその位相の一部では、シカゴ経済の再建あるいはそのための資本の再誘致を進めるために、ワシントン市政が八〇年代アメリカ大都市政治の一般的特徴である行政の合理化と民間活力導入型の政治手法を積極的に導入し始めていたことも、やはり否定し難い事実であった。もし仮説として問うのであれば、このように複雑な位相の組み合わせをはらんだ政治連合が、ワシントンを核として彼の市政の第二期にどのような展開を示しえたかを推量することはそれなりに興味をそそる問題ではある。しかし、われわれがいま確認できるものはもとより事実だけである。再選から七カ月後の八七年一一月、ともあれこの政治連合の中心にあったワシントンその人が、市政半ばにして逝った。

五　代理市長ユージン・ソーヤーの選出と一九八九年シカゴ市長選

すでにワシントンが死去してから今日までに二年余りが経過している。彼の死から一年五カ月後の今年（八九年）四月、シカゴにおいては、ワシントン前市長の急死のため、彼の残任期間（九一年四月まで）を勤める正式市長を選出するための臨時市長選挙が再び行われた。当選したのは、八三年シカゴ市長選挙民主党予備選に初出馬し、ワシントンさらにバーンの後塵を拝して敗れたあのリチャード・M・デーリーであった。彼の父デーリーの急死から一三年後、デーリー家にとっては悲願ともいわれる長男リチャードの市長当選であった。[55]

われわれは八三年のシカゴ市長選挙を中心にすでにかなりの紙幅を費やしてきた。もはやこれ以上の論述は幾分かの冗漫に陥ることを恐れるが、本節にみる八九年のシカゴ市長選挙は、八三年以来のシカゴ政治の変動が今日まで辿ったわれわれが確認できる確実な一つの節目である。ワシントンの死から今年のデーリー市長の当選までのいきさつを簡単に記し、あわ

せて結びを添えて、本論を終えたい。

ワシントン市政が残したかもしれない長期的な遺産はさておき、少なくとも今日までのところ八七年一一月二五日のワシントンの突然の死は、シカゴ黒人社会はもとより、シカゴ政治を構成するさまざまな勢力、さらには黒人政治運動に関係する全国的な政治勢力の多くに対しても、複雑な戸惑いと波紋を与えているようにみえる。ワシントンの急死後慌ただしく日程が組まれた市会による代理市長の選出（八九年春に日程が組まれた臨時市長選挙までの期間を勤める市長――規定によって市会がそれを選出した）は、一週間後の八七年一二月一日から二日の早朝にかけて、五千名の群衆がシティ・ホールを取りまき甲高い抗議の声をあげるという異常な騒ぎの渦中で、一二時間にも及ぶ市会討議のすえに行われた。[56]

この市会において八九年春までの代理市長に選任されたのは、市会初当選が七一年という古参市議、シカゴ市会第六区選出のユージン・ソーヤー（Eugene Sawyer）であった。ワシントン死亡直後にでたニューヨーク・タイムズ紙は彼を、伝統的な民主党マシーン・タイプの市議として市会に出たが、八三年シカゴ市長選挙の折にはワシントンの市長選立候補をいち早く支持した黒人市議であったとして、ワシントンの盟友であるという表現を添えて紹介している。しかし、シティ・ホールを取り巻いた黒人コミュニティ運動家多数を含む群衆が口にしていたのは、このソーヤーではなく、市会でワシントン派のフロアー・リーダーを勤めた、シカゴ第四区選出のティモスィ・C・エバンズ市議（Timothy C. Evans, 七九年初当選）であった。市会における投票結果は複雑であった。ソーヤーを支持したグループは、五人の黒人市議に加えて、従来ワシントンとことごとく対立していたシカゴ民主党マシーン派議員を含む、多数の白人市議であった。その総数は最終的に二九票を占めたという。残る黒人市議票（一三名）が、数名の白人リベラル市議を加えてエバンズ支持に回った。（さらにこのグループにはヒスパニック系市議二名が加わったように新聞からは読みとれる。しかしこれは現在の資料では確認できない）。彼らの総数が一九であった。市会がこの数の比率で二陣営に分裂することは、ワシントン第一市政期の市会構成の再現と見れば、とりたてて不思議

ではなかったかもしれない。しかし、八七年四月のワシントン再選以後、市会の構成は表向き市長支持派が四〇名を数えて、ワシントンの市会掌握が完全に実現したと言われていたことをみれば、ワシントン死去からわずか一週間後にしてこのように表面に吹き出た市会の分裂は、やはりセンセーショナルでないはずはなかった。

シティ・ホールを取りまいたエバンズ支持の群衆がソーヤーをアンクル・トムとあだ名し、彼の選出を白人人種主義者が黒人票を票田としてのみ利用するかつての「プランテーション・ポリティクス」に、シカゴ政治と黒人社会を引き戻す行為と批判していたことを、どのように解すべきか。八七年四月から一一月までのワシントン支持派というグループが、ワシントンという頭をとれば、なるほど複雑な寄り合い所帯であったことは確かであろう。しかし、それ以上にここで興味深い事実は、ワシントン市政に入ってからの四年間黒人市長支持という目的で一応の統一を保っていたシカゴ市会の黒人市議グループまでが、二つに分裂したことであった。

筆者はいまのところ、八七年末以後のこの事態についてさしあたって入手できる新聞報道以外には、分析のための多くの資料を持たない。ソーヤーとエバンズに対する以下の記述はその限られた資料によるごく簡単な素描にしかすぎない。

ソーヤーについてのニューヨーク・タイムズ紙の紹介をいま少し続けると、同紙は彼についてこうも紹介している。ソーヤーはワシントン市政の忠実な支持者であったが、ワシントン市政第二期に入って市長が提案したシカゴ市不動産税の増税には、反対の態度を示していたという。またソーヤーの選挙区である第六区はシカゴにおける最も富裕な黒人住区の一つチャタム（Chatham）住区を含む、圧倒的に黒人中産階級主体の選挙区であるとも言われる。黒人が所有する金融機関として合衆国最大規模の銀行シーウェイとインデペンデンスの二社が本店を置くのが、このチャタムであるという。このような選挙区基盤と彼の不動産税への関心は、黒人実業界と太いパイプを持つソーヤーの一面を示唆するということなのであろうか。[57]

他方、八七年一一月のワシントン急死後シカゴ市会の一三名の黒人市議が支持したエバンズについても、彼が七九年初当選

という黒人市議のなかでは比較的新しい世代に属した人物であること、またワシントン市政下の市会において彼が最も積極的な改革派市議であったこと、またおそらくそのためであろうワシントンの死後、黒人コミュニティ運動家は彼をいち早く支持し代理市長に押し立てようと画策したという以外には、筆者が知り得た事実は決して多くはない。ただワシントン市政と彼の選挙戦を支えるために、八三年以来ワシントン周辺で精力的な活動を続けてきたシカゴ在住の政治コンサルタント、ダン・ローズ（Don Rose）は八九年の選挙戦においてエバンズを支持し、次のように語っていた。ワシントンを勝利に導いた運動と同じ大衆的運動を再現することが期待出来るのはエバンズである、と。しかしニューヨーク・タイムズ記者ウイリアム・シュミットは、この期待も八九年選挙では実現が困難であろうと記していた。[58]

市長選の経過は次のようであった。二月二八日に投票日が設けられた民主党予備選は、現職の黒人市長ソーヤーに対し、八七年一二月の選挙で彼の代理市長選出を支持した民主党マシーン派が、一転してデーリー支持に変身するという鮮やかな転換のなかで、ソーヤーとデーリーの闘いとなった。ソーヤーは初めから劣勢を伝えられ、実際選挙結果は、デーリー票が約四九万、ソーヤー票は三七万であった。ソーヤーは投票した黒人票の九五パーセントを確保したが、ニューヨーク・タイムズは、選挙の投票率がこの八〇年代シカゴ市長選の中では最も低い六四パーセントにシャープに下降したと伝えた。[59] 四月五日の本選挙は民主党予備選を制したデーリーに対し、エバンズが独立候補として挑んだ選挙であった。しかし、結果は、デーリー票がおよそ五九万票、エバンズが四一万票であった。[60]

かくして八〇年代が終ろうとしているいま、シカゴは、八〇年代前半の喧噪に満ちた政治変動から一転して、大都市市長選挙において現職の黒人市長が白人対立候補に敗れた最初の都市であると言われる、シカゴ黒人社会また黒人運動家にとっては痛恨事に違いない政治状況に反転した（もちろんこの場合のソーヤーは代理市長ではあったが）。四月本選挙の結果を報じたニューヨーク・タイムズ紙は、敗北に呆然とするシカゴ黒人指導者の状況を次のように記していた。「シカゴ黒人政治指導者、ま

た活動家の多くは、怒りをあらわに示すよりも、気落ちして自失しているように見える」[61]、と。

八三年ハロルド・ワシントンの当選から始まったシカゴ市政における黒人市長時代は、かくして八九年四月、一応の幕を閉じた。すでに述べたごとくわれわれは、現時点で、ワシントン市政の改革的性格、あるいは少なくとも実績について否定的評価があることを知っている。筆者はその根拠が無視できないものであることを本論でも紹介した。しかしそれにも拘らず、この批判をいまの段階では時期尚早であろうとあえて記した。本論を結ぶにあたって、その点に重ねて触れて結語としたい。

八九年の市長選では、結局シカゴ黒人社会は二人の黒人候補に分裂した。今日、白人社会以上に経済的格差が激しいと言われる黒人社会の複雑な経済的利害、社会関係を思えば、この分裂は有り得るべきものが来たと見てよい政治現象なのかもしれない。八三年選挙においてワシントン市長擁立運動が戦略としてたて、現在ジェーシー・ジャクソンが全国政治というさらに広い政治領域で模索している、アメリカ政治の党派ないしは対抗図式を、権力を持つ内なるものに対しての外のもの、さらにはマイノリティというレトリック、さらには人種という枠組みを借りて再編しようとする試みは、政治戦略としてある程度まで有効性を持つことを八〇年代の黒人市長擁立運動は立証した。しかし、その戦略は決して調和のとれた整合性のある政治連合を運動の主体の側に結果した訳ではなかったこと、このことも事実であった。ワシントン死後のシカゴの政治変動が重要である点は、何よりもこの運動が、容易に克服し難い多くの不協和音を含んだものであったことを具体的に、ある意味では極めてドラスティクに露呈した点であろう。さらに言えばわれわれはまずこの事実を確認した。その点に、八〇年代シカゴ政治が辿った軌跡の歴史的意義の一つを読みとることも出来るのであろう。[62]

しかし、以上の点を認めた上で、同時にわれわれは改めて問題を次のように問うことも許されるかもしれない。そもそも均衡のとれた均一性のある政治連合なるものは、二〇世紀のアメリカ政治の過程でいつの時代に見られたものであったろう

か。ついぞそのようなものを、われわれは見たことはなかったのではないか。もしそうであるとすれば、多様で不協和音を間違いなく含んだ政治連合を、さしあたりの戦略的な結節点でプラグマティクに結び付けようとする折々の試みを、短期的な結果のみをもって直ちに批判することは、評論的意味はあっても長期的には、実のところアメリカ政治の閉塞性を増すことにはならないか、と。筆者がワシントン市政について当面結論じみた評価をすることに慎重でありたいと考える最も大きな理由は、このワシントン黒人市長を擁立しようとする運動が少なくともシカゴ政治を従来になく活性化し、民衆の投票率を高めた事実、その点にこの運動の相応の意味を見いだしたいと思うからである。

いま一度次の点を確認することも無意味でないかもしれない。八九年、シカゴにおいては黒人市長擁立の運動はなるほど挫折した。しかし、八九年選挙を客観的に眺めれば、やはりこの選挙も八〇年代シカゴの政治変動の文脈と全く無縁のものではなかった。八九年選挙は、八三年および八七年には及ばなかったが、七〇年代のシカゴ市長選挙に較べれば、はるかに広い市民の政治参加をもたらし、投票の絶対数は高かった。とくに本選挙に独立候補として出たエバンズが四〇万票を獲得したことは、アメリカ政治における独立候補の不利な状況、また民主党の金城湯池であったシカゴ政治の歴史を考えれば、十分記すに値する意味を持つように筆者には思われるのである。ただし、問題はこの民衆参加が今後どのように持続し、かつまた新しい政治連合を形成するかであろう。しかし、それはもはや歴史家の記す領域を越えていく。九〇年代のアメリカ政治の動向に強い関心を寄せながらここではとりあえず筆を擱くほかない。

（一九八九年一二月三〇日脱稿）

注

近年ニューヨーク・タイムズなどの新聞を引用する研究者の多くは、執筆者の名前及び記事のタイトルまで記入することが多い。なるほど、今日の記事はいずれも執筆者の署名入りであることを思えば、このような注記は合理的なもののように思う。本稿も一部それに倣った注記をしている。ただし、この小論の場合、依拠した資料の多くが新聞記事であるため、すべてについて執筆者、記事のタイトルを記すと、注が徒に煩わしくなる恐れを感じた。このため上記のスタイルに沿った注記は、本文との関連で執筆者の名前あるいは記事のタイトルをぜひ記したいものに限定し、その他については、従来通り紙誌の名称、発行日、頁数を記すにとどめた。またシカゴ・トリビューン紙については一部頁数を記入していないものがある。これらの記事は筆者が、留学中に切抜きし、スクラップ・ブックに張り付けておいたものである。その際日付は確かであるが、頁数を打ち漏らしたものが一部にあった。現在の筆者の環境ではシカゴ・トリビューン紙に改めてあたり頁数を確認することが困難であるため、これらの記事の頁数についてはさし当り省くほかなかった。

本稿が使ったニューヨーク・タイムズ紙面の頁数のうちかたは、いわゆる本紙の第一部にあたるものについてはその頁数のみで記している（例えば第一部一頁については p.1）。通常、B、C以下のアルハベットで区分されている第二部以下については、部をローマ数字で示して、例えば第二部の一頁である場合には、p.II 1 というように記した。これはニューヨーク・タイムズ・インデックスに倣ったものである。

① 本論中の数字は、すべて文中に言う社会学者ウィルソンの文献によっている。William Julius Wilson, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, The Underclass, and Public Policy* (The University of Chicago Press, 1987), especially chs. 2, 3, 4.

② シカゴ民主党マシーンについてはさしあたり次の文献が参考になるであろう。Alex Gotteried, *Boss Cermak of Chicago: A Study of Political Leadership* (The University of Washington Press, 1962); Lyle W. Dorsett, *Franklin D. Roosevelt and the City Bosses* (Kennikat Press, 1977); Johns M. Allswang, *Bosses, Machines, and Urban voters: An American Symbiosis* (Kennikat Press, 1977).

③ Arnold R. Hirsch, *Making the Second Ghetto: Race and Housing in Chicago, 1940–1960* (Cambridge University Press, 1983), ch. 1.

④ *Ibid.*, pp. 264–265.

⑤ Manning Marable, *Black American Politics: From the Washington Marches to Jesse Jackson* (Verso, 1985), pp. 206–209.

⑥ John M. Allswang, "Richard J. Daley: America's Last Boss," in Paul M. Green and Melvin G. Holli, eds., *The Mayors: The Chicago Political Tradition* (Southern Illinois University Press, 1987), p. 156.

⑦ ここでワシントンの経歴を簡単に記しておきたい。

一九二二年シカゴ・サウス・サイドに生まれる。父は牧師であり、また弁護士、かつ民主党系の組織活動家。第二次大戦中、四年間空軍に勤務。大戦後、G・I法の適用を受けて、シカゴ・ダウンタウンのローズヴェルト・カレッジに入学。その後、ノースウェスタン大学ロー・スクールに進み、五二年卒業。弁護士資格取得。五三年、父の死後、彼の後をついで、シカゴ市準法人関係法律顧問 assistant corporation counsel の職に就き、初めてシカゴ政治との間に公式の関係を持つ。六三年、イリノイ州下院議員に当選。同議員在職中の七一年に脱税の罪で起訴され七二年に有罪、一カ月の収監を経験。七六年、イリノイ州上院議員に当選。八〇年連邦下院議員に当選。八三年、黒人として初めてのシカゴ市長に当選。同年四月市長に就任。八七年四月市長に再選。

八七年一一月二五日現職のまま死去。

Cf. William J. Grimshaw, "Harold Washington: The Enigma of the Black Political Tradition," in *ibid.*; Robert McClory, "Up From Obscurity: Harold Washington," in Melvin G. Holli and Paul M. Green, eds., *Chicago 1983: The Making of the Mayor* (William B. Eerdmans, 1984) 〔以下この文献を *Chicago* と略記する〕, pp. 3–15. なお以後一九八三年選挙までのワシントンについての記述においても、特に注記しないが右の二つの論文に負うところが大きい。

⑧ Milton Rakove, "Reflections on the Machine," in *Chicago*, pp. 127–129.

⑨ Nathaniel Sheppard, Jr., "Unavoidable Issue: Chicago Mayor's Switch Makes Race a Key," *New York Times*, March 18, 1983, p. 14.

⑩ Wilson, *op. cit.*, pp. 49–50, 55–62.

⑪ Michael B. Preston, "The Resurgence of Black Voting in Chicago: 1955–1983," in *Chicago*, pp. 39–43; Wilson, *op. cit.*, p. 50.

⑫ 七七年市長選へのワシントンの出馬については、以下の論文が詳しい。Grimshaw, "Harold Washington," in Green and Holli, *The Mayors*, p. 198. なお七五年、ワシントンより市長選への立候補を勧められたメトカフは結局、出馬しなかった。

⑬ 一九八二年一〇月九日付シカゴ・トリビューン紙に掲載されたバーン市長関係の記事は、彼女を、これまでレーガンと彼の政策を最も強く支持してきたハイクラスの民主党公職者の一人であると表現している（*Chicago Tribune*, Oct. 9, 1982, p. 5）。なお、クレップナーの研究はバーンとレーガンとの関係が一九八〇年の選挙時点からのものであったことを指摘している。Paul Kleppner, *Chicago Divided*, p. 136.

⑭ 八〇年、八四年大統領選挙におけるシカゴの投票動向については、ニューヨーク・タイムズの以下の記事が興味深い。William Schimidt, "Daley Pining Mayoral Hopes on Party Ranks," *New York Times*, April 3, 1989, p. 10.

⑮ McClory, "Up From Obscurity," pp. 9–10; Grimshaw, "Harold Washington," pp. 198–199.

⑯ *Chicago Tribune*, Dec. 4, 1982, pp. 1–2.

⑰ Klepper, *op. cit.*, p. 41; Marable, *op. cit.*, p. 223.

⑱ *Chicago Tribune*, Nov. 8, 1983. 引用文中にいわれる八二年夏からの有権者登録運動については、本論において改めて取り上げるのでここでは特段の説明を省く。なおついでながら、二〇世紀のアメリカにおける投票には、一般的に、投票日に先立ち、居住の証明など投票資格があることを申請する有権者自身の選挙登録が必要である。レジストレーション registration と呼ばれる制度である。

⑲ *New York Times*, Nov. 11, 1982, p. 24; "Mayor's who?" *Time*, Sept. 6. 1982, p. 23; David Moberg, "Jane Byrne (s), Daley Fiddles, Washington Hopes," *Nation*, Feb. 19, 1983, pp. 207–208.

ここで簡単に八三年の市長選挙時点で現職市長であったバーンを紹介しておこう。かつてデーリー市政末期に市の有力官僚であったこのアイルランド系の小柄な女性は、彼女自身シカゴ市政における最初の女性市長として、シカゴ政治史に記憶されてしかるべき人物であろう。彼女の登場も当初はシカゴ民主党組織の枠外からのものであった。一九七九年、彼女はデーリー死後のシカゴ民主党マシーンを率いた現職市長マイケル・A・ビランディック（七七年臨時市長選において当選）に対し、組織外からの新顔として挑戦し初当選した。しかし、当選後バーンはいち早く民主党組織指導部と折り合い、かなり強引な形で組織における地盤と指導権を拡大したと言われる。しかし、バーンとの折り合いを拒んだ勢力はこの時期から将来の市長を目指すデーリーを支持

し始め、バーンとデーリーとの抗争は、八〇年、デーリーがイリノイ州クック郡検事選挙に立候補して以来、いずれ将来爆発するものとみられた確執であった。またバーン市長が八三年市長選挙に向けて、市公共事業関連の建築業者を中心に集めた選挙運動資金は九〇〇万ドルとも一千万ドルとも言われる。アメリカにおける市政選挙のために集められた政治資金としては、文字どおり破天荒の額であった。こうした政治資金の準備が進んでいたことからすれば彼女の市長選立候補が、三人の有力候補の中では最も遅い一一月二二日であったことはこの際全く形式的な問題である。

⑳ *New York Times*, Jan. 30, 1983, p. IV2 ; Richard Day, "Polling in the 1983 Mayoral Election," in *Chicago*, p. 89.

㉑ "Daley's the best hope," editorial, *Chicago Tribune*, Jan. 23, 1983.

㉒ Paul M. Green, "The 1983 Chicago Democratic Mayoral Primary: Some New Players—Same Old Rules," in *Chicago*, p. 29.

㉓ Day, "Polling," p. 89.

㉔ Nathaniel Sheppard, Jr., "Mayor Byrne and Blacks," *New York Times*, Jan. 12, 1983, p. 13.

㉕ Rogers Worthington, "West Siders see Jobs as the No. 1 issue," *Chicago Tribune*, Feb. 1, 1983, p. 5.

㉖ Marable, *op. cit.*, p. 226.

㉗ "Chicago's Bare-Knuckle Race for Mayor," *U. S. News & World Report*, Feb. 21, 1983, p. 53.

㉘ Kleppner, *op. cit.*, pp. 175 - 176.

㉙ *New York Times*, Feb. 23, 1983, pp. 1, 12, Feb. 24, pp. 1, II 10.

㉚ "Learning from Chicago," editorial, *New York Times*, Feb. 25, 1983, p. 30.

㉛ Nathaniel Sheppard, Jr., "Blacks in Chicago Press Voting Drive," *New York Times*, Jan. 26, 1983, p. 13; "A Black Mayor for Chicago?" *Time*, March 7, 1983, p. 42; "Washington's Win," *Nation*, March 12, 1983, p. 294.

㉜ Andrew H. Malcolm, "Democrat Elected Mayor of Chicago by Narrow Margin," *New York Times*, April 13, 1983, pp. 1, 19; Don Rose, "How the 1983 Election Was Won," in *Chicago*, p. 122.

㉝ *New York Times*, March, 14, 1983, p. 14, April 13, pp. 1, 19; "The Making of a Litmus Test," *Time*, April 11, 1983, p. 15.

㉞ "Chicago Lesson," *Nation*, April 30, 1983, p. 531.

㉟ *New York Times*, Feb. 27, 1983, p. 24.

㊱ Cf. Studs Turkel, "The Chicago Machine is a Junk Heap," *New York Times*, April 17, 1983, p. IV 19.

㊲ "The Battle for Chicago," *Nation*, May 23, 1983, p. 23; *New York Times*, March 16, 1986, p. 26, April 29, p. 15. 八六年四月、シカゴは市会の選挙区を一部改正し、それに基づく若干名の市会選挙を行っている。その結果、市会構成はボルドリアック派二五名、ワシントン市長派二五名の構成となり、ワシントンの市会運営は幾分改善されたという。

㊳ E. P. Shipp, "Chicago Mayor Loses Budget to Council Foes," *New York Times*, Dec. 14, 1983, p. 26.

㊴ William Grimshaw, "Is Chicago Ready for Reform? or, A New Agenda for Harold Washington," in *Chicago*, pp. 141 - 163; Marable, *op. cit.*, pp. 191 - 246.

右の二人の政治学者は、ワシントンの選挙と彼の市政を改革運動とみる視点で共通しているが、その評価には若干の相違がある。前者は、ワシントンの改革を「公平さ」を標榜する中産階級からマイノリティ、貧困者までを包含した、社会関係の改善と社会的威信の公平さを求める「地位改革」status reform の運動であると捉えるのに対し、後者は、ワシントンの運動が単なるマシーン政治の主役交代にとどまる危険を指摘し、この運動が民主党の枠を飛び出す可能性あるいはそれに向けての運動の担い手の努力を強調している。しかしいずれにしても両者は、ワシントンを支えた勢力が、知られる以上に多様であることを指摘している点で興味深い。

㊵ Marable, *op. cit.*, pp. 222－223.

㊶ Abdul Alkalimat and Con Gills, "Black Political Protest and the Mayoral Victory of Harold Washington: Chicago Politics," *Radical America*, 17 (Nov. 1983), pp. 119－120; William E. Schmidt, "Leader Who Personified Black Rise to Urban Power," *New York Times*, Nov. 26, 1987, p. Ⅳ 19.

㊷ Walter Isaacson, "Picking Up the Pieces," *Time*, April 25, 1983, p. 12.

㊸ *New York Times*, Feb. 24, 1983, p. Ⅱ10.

㊹ *New York Times*, April 15, 1983, p. 14.

㊺ Nathaniel Sheppard, Jr., "Chicago Mayor Assumes Office Vowing Layoffs," *New York Times*, April 30, 1983, p. 1. なおシカゴ市の八三年の一般支出は約一〇億八千万ドルであった。

㊻ Dirk Johnson, "Chicago Mayor's Victory Prize: Council Peace," *New York Times*, April 19, 1987, p. 22.

㊼ *New York Times*, Nov. 26, 1987, p. 1.

㊽ Dick Johnson, "Chicago Mayor, with New Power at Home, plans a Larger National Role," *New York Times*, May 4, 1987, p. 16.

㊾ *Ibid*.

㊿ "Harold Washington's Chicago," editorial, *New York Times*, Nov. 30, 1987, p. 30.

(51) Steve Neal, "Washington a Hero to Blacks but many Whites still wary," *Chicago Tribune*, Dec. 23, 1986, p. 1; Robert Davis, "Byrne Slipping in Campaign geared to avoid the Fray," *ibid*., Dec. 23, 1986, p. 1; Andrew H. Malcolm, "Mayor of Chicago Retaining a Lead," *New York Times*, Jan. 15, 1987, p. 27.; Raymond Coffey and John Camper, "Washington Win at Wire," *Chicago Tribune*, Feb. 25, 1987, p. 1; Dirk Johnson, "Chicago Re-elects Washington as Mayor," *New York Times*, April 8, 1987, p. 20.

(52) *Chicago Tribune*, Feb. 25, 1987, pp. 1, 4, Feb. 26, pp. 1, 24; *New York Times*, Feb. 25, 1987, pp. 1, Ⅱ 9, Feb 26, p. 14.

この民主党予備選挙の投票率七六パーセントは、八三年予備選が七七パーセントであることからして、ほぼ八三年予備選と同程度の投票率であったことになる。

(53) 以下は表3についての若干の細部に係わる分析である。この表をみるとワシントンがバーンに大差をつけて勝った地区は、シカゴ市会選挙区五〇のうち一九の選挙区であった。選挙区番号で言えば、一、三、四、五、六、七、八、九、一五、一六、一七、二〇、二一、二四、二七、二八、二九、三四、三七である。以上の一九選挙区はすべて黒人が住民の多数を占める地区であった。ここでの八七年のワシントンの得票は、いずれの選挙区でも、八三年市長選挙

民主党予備選挙時のワシントン票を上回るものであった。この点ではワシントン票はどの黒人地区でも確実に増加したということになるが、とくに増加が目立つのは、選挙区番号で二四、二九、三七のシカゴ・ウェスト・サイドの選挙区であった。これらの地区住民の経済的地位はシカゴでも最も貧しい地区であるといわれる。またワシントンがサウス・サイドの出身であるということで、八三年にはワシントンの知名度が最も低い地区でもあった。こうしたウェスト・サイドの貧困地区もワシントン票に取り込まれたことは、この選挙でのバーンの敗北を決定的にしたように見える。なおこの八七年民主党予備選挙でワシントンが勝利した選挙区は、以上の一九選挙区の他に一、二二、二六、三一、四六、四八、四九の七選挙区であった。ここでの彼の勝利は比較的僅差であるが、この選挙区の性格を見るとワシントンの黒人社会以外での得票基盤がどこにあったかが改めて確認できる。七つの選挙区のうち二二、二六、三一はやはりシカゴの地図でダウンタウン・ループ地区を西に入った、いわゆるヒスパニック系の住民が増加している、人種的にはヒスパニック系、黒人さらにその他が混合している地区である。また四六、四八、四九とは以上の選挙区と性格を全く異にし、レーク・フロント地区と呼ばれる、ミシガン湖畔に面したシカゴ市北部の、比較的富裕なまた教育水準の高い白人リベラルが多い地域である。

㊹ Abudul Alkalimat, "Mayor Washington's Bid for Re-Election: Will the Democratic Party Survive?" *The Black Scholar*, 17 (Nov.-Dec. 1986), pp. 12-13.

㊺ Dirk Johnson, "Daley Wins as Mayor of Chicago, Ending Six Years of Black Control," *New York Times*, April 5, 1989, p. 26.

㊻ 以下の叙述はニューヨーク・タイムズ記者ディック・ジョンソンによる次の四つの記事に多くを負っている。Dirk Johnson, "Black Entering New Era in Chicago," *New York Times*, Nov. 30, 1987, p. 16; idem, "Feuding Delays Selection of Chicago Mayor," *ibid.*, Dec 2. 1987, p. 20; idem, "Chicago in Turmoil as Mayor is Chosen," *ibid.*, Dec. 3, 1987, p. 26; idem, "Racial Politics," *New York Times Magazines*, Feb. 19, 1989, p. 36.

㊼ *New York Times*, Dec. 2, 1987, p. 20, Feb. 25, 1989, p. 8.

㊽ *New York Times*, Nov. 30, 1987, p. 16; William Schmidt, "Ethinic Voting in Chicago May Jar Daley on Road to Mayor's Office," *ibid.*, March 2, 1989, p. II 9.

㊾ *New York Times*, March 1, 1989, pp. 1, 21, March 2, 1989, pp. 1, II 9.

㊿ *New York Times*, April 5, 1989, p. 26.

(61) *New York Times*, April 6, 1989, p. 18.

(62) なおここでは関連して、シカゴ以外の黒人市長の最近の動向にも簡単に触れることが無意味ではなかろう。今年の三月に出たニューヨーク・タイムズの記事は、ワシントン特別区の市長であり、従来黒人労働者から圧倒的な支持を受けていたといわれるマリオン・S・ベーリー二世（Marion S. Barry, Jr.）市長が、最近黒人社会の支持を急速に失いつつあり、九〇年選挙での再選が危ぶまれると報じている。ベーリーはすでに七九年以来の市長であり、八三年シカゴ市長選においても、著名な黒人市長としてまた公民権運動家としてワシントンの応援に駆けつけた人物であった。彼の苦境も近年の黒人市長を取り巻く一つの興味をひく事例であろう。報道によれば、ワシントン特別区における麻薬および犯罪問題の深刻化、さらには彼自身にかかる麻薬使用の疑いなどが、ベーリーへの批判の根底にあるものと伝えられている（B. Drummond Ayres, Jr. "Capital Mayor's Coalition Unraveling," *New York Times*, March 6, 1989, p. II 10）。

表4　1983年2月22日シカゴ市長選挙民主党予備選挙における各候補の得票
（ワード別）

Ward	Washington	Byrne	Daley
1	7,705	7,539	3,210
2	15,882	3,244	803
3	17,068	2,613	672
4	17,927	3,112	1,961
5	18,471	3,188	2,359
6	26,979	3,075	987
7	12,147	4,061	2,393
8	23,946	2,426	1,325
9	17,691	3,391	1,174
10	6,560	15,005	6,242
11	3,586	2,552	21,239
12	1,750	7,633	13,510
13	239	15,388	17,854
14	1,669	10,403	9,912
15	11,143	6,405	5,431
16	16,604	4,061	747
17	21,559	3,224	799
18	11,181	7,125	12,480
19	4,029	8,110	20,687
20	18,313	2,883	721
21	25,550	2,687	865
22	1,780	3,067	3,907
23	199	11,159	19,598
24	16,296	3,598	633
25	2,620	4,977	3,459
26	1,488	8,208	6,610
27	13,811	4,304	1,024
28	15,154	2,764	727
29	13,592	3,112	1,110
30	516	12,571	8,520
31	2,709	8,357	4,791
32	2,698	7,303	8,452
33	1,508	11,171	5,658
34	22,601	2,676	659
35	744	10,404	8,841
36	343	16,486	12,940
37	11,673	5,482	2,947
38	385	15,180	13,275
39	780	12,619	9,493
40	1,005	9,417	9,226
41	543	15,964	14,243
42	6,602	9,068	8,123
43	4,195	13,758	10,695
44	4,315	12,225	8,771
45	483	14,309	15,920
46	5,426	8,211	6,043
47	1,308	13,053	9,504
48	5,024	8,160	6,385
49	4,757	9,630	7,111
50	1,553	12,526	10,440
合計	424,107	387,884	344,476

典拠　Green, "The Primary," p. 37, table 1.

図2　1983年民主党予備選挙においてワシントン，バーン，デーリーがそれぞれ得票において一位を占めたワード（表4のデーターにより作図）

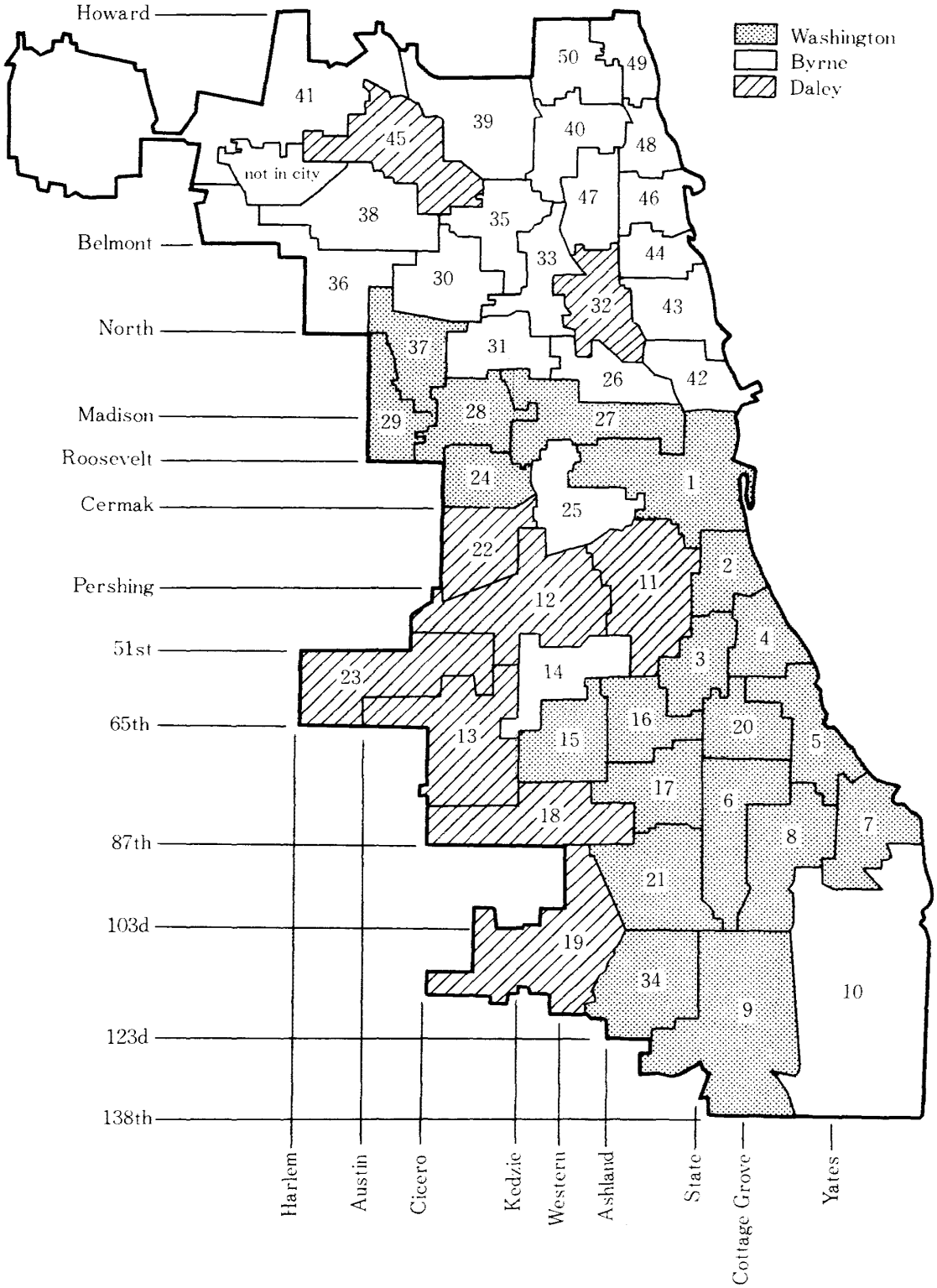


表5　1983年4月12日シカゴ市長選挙におけるワシントンとエプトンの得票
（ワード別）

Ward	Washington	Epton
1	13,033	7,782
2	22,749	558
3	24,472	178
4	24,428	1,984
5	24,738	2,455
6	35,052	240
7	17,304	3,776
8	31,106	458
9	24,076	1,521
10	10,105	19,651
11	7,200	20,574
12	3,838	21,059
13	1,460	34,893
14	3,864	20,117
15	15,954	10,168
16	25,654	221
17	29,264	206
18	14,894	19,096
19	7,056	28,095
20	25,713	220
21	32,962	275
22	4,674	4,279
23	1,373	32,404
24	24,265	129
25	5,925	6,099
26	7,449	8,823
27	20,710	1,577
28	22,339	224
29	19,884	1,531
30	3,034	20,853
31	9,857	6,399
32	8,268	10,526
33	6,909	11,298
34	29,372	336
35	3,414	18,661
36	1,651	31,968
37	17,555	5,254
38	1,883	30,942
39	3,127	22,161
40	3,772	18,217
41	2,380	32,733
42	12,496	14,894
43	11,008	19,620
44	10,613	16,372
45	2,376	31,737
46	10,251	11,543
47	4,515	20,403
48	9,433	12,269
49	9,719	12,815
50	5,002	22,368
合計	668,176	619,962

典拠 Rose, "How the 1983 Mayoral Election Was Won," p. 124, Table 3.

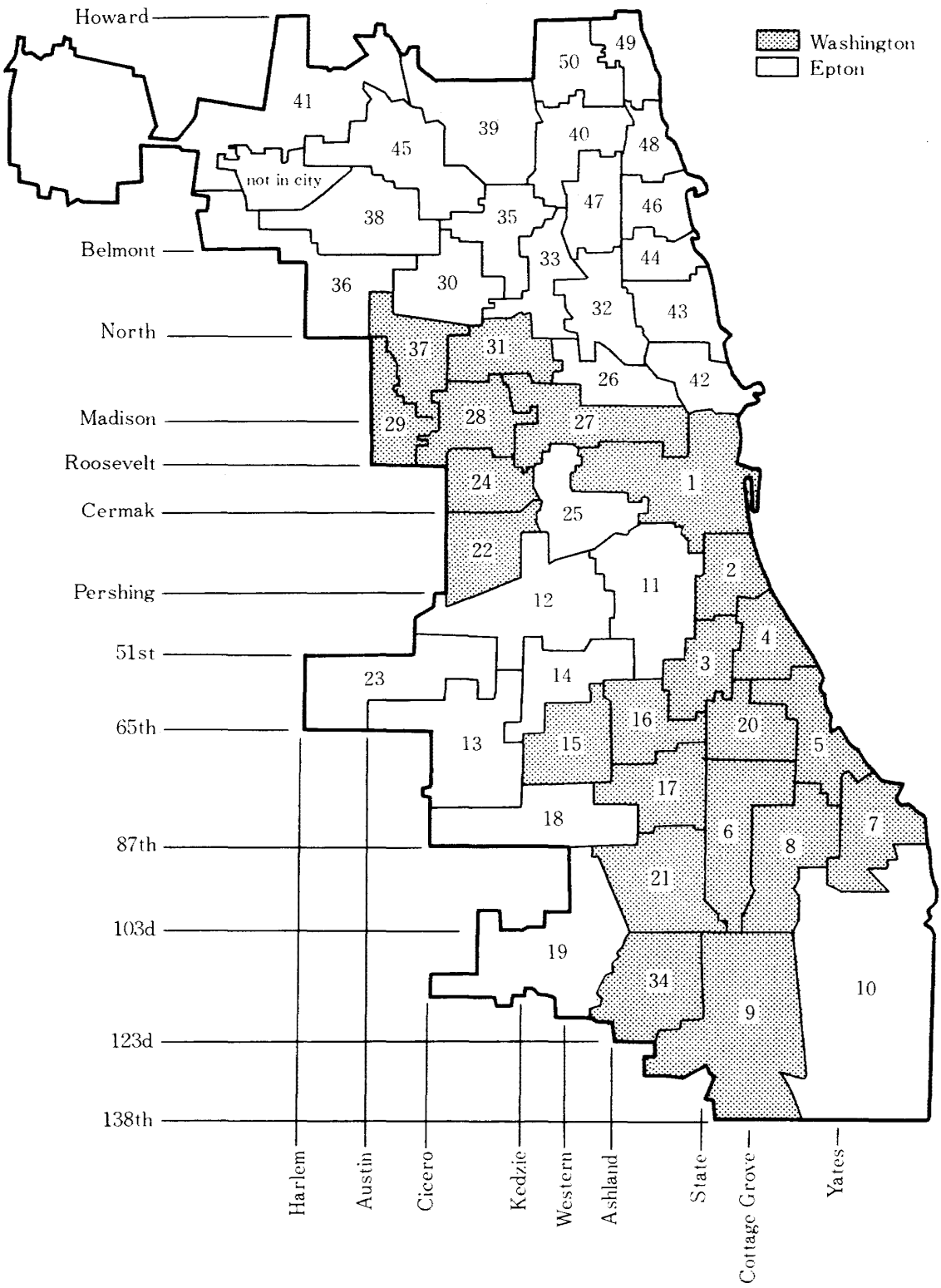



図3　1983年シカゴ市長選挙におけるワシントンとエプトンがそれぞれ一位の得票を得たワード（表5のデーターにより作図）